

ENFORCEMENT REPORT

ENFORCEMENT REPORT

Malaysia PLANTING TREES Work CAMP 2007 SUMMER



2007.8.21-8.28

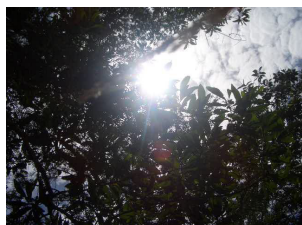
高校生マレーシア植林ワークキャンプ2007夏報告書発刊に際して

実行総責任 北川 達也

2001年から始まった海外ワークキャンプ事業も今年で7年目を迎え、その間多くの高校生たちが海外へ飛び立ち、様々な貴重な体験をしてきました。今年も多くの方の支えを受けながら、無事にワークキャンプを終えることができました。それも、本ワークキャンプの趣旨を理解し、多大なご協力をいただいた皆様のおかげだと感じております。この場を借りて、本ワークキャンプ実施にご配慮くださった全ての方に御礼申し上げます。

23人の高校生たちが環境問題について真剣に考え、自分にできることを探し、行動しつづけてきたこの半年間。時に環境問題の難しさが故に悩み、時に募金活動を通じて多くの人々の優しさに触れ、そしてマレーシアの生活で感じた幸せの意味。彼らが得た様々な想いは、一言で言い表すことはできません。そういった意味では、ワークキャンプには1つの物語ではなく、23通りの物語があったのだと思います。この報告書は、そんな彼らを感じた想いの一片を紹介することしかできないでしょう。しかし、彼らの辿ったかけがえのないこの半年間の軌跡は、きっと皆様の胸に届くことと思います。この報告書が彼らの想いを広めるものとなれば幸いです。

Contents



報告書発刊に際して

目次

参加者・スタッフ紹介

スケジュール

事前学習

マレーシアでの活動

帰国後の活動

参加者感想文

スタッフ感想文

アンケート集計・考察

新聞掲載記事

お世話になった方々





Members

High School Students

足立 諒子
油谷 麻衣
犬飼 侑子
大田 佳那
岡本 華
北山 滢
木原 志穂
日下 みなみ
佐々木 彩華
塩谷 晶子
柴田 知美
千崎 凡那巳
辰巳 礼
辻 沙織
平野 優子
藤井 みなみ
藤原 佐智
松尾 美侑
松本 明香
水野 佑紀
向 裕介
山崎 真理
吉岡 絵里奈

箕面自由学園高等学校 2年生
清風南海学園高等学校 2年生
菫合高等学校 1年生
菫合高等学校 3年生
菫合高等学校 3年生
菫合高等学校 2年生
箕面自由学園高等学校 2年生
クラーク国際高等学校芦屋キャンパス 2年生
啓明学院高等学校 2年生
園芸高等学校 2年生
賢明女子学院高等学校 1年生
賢明女子学院高等学校 1年生
菫合高等学校 2年生
神戸松蔭高等学校 1年生
菫合高等学校 3年生
啓明学院高等学校 1年生
園芸高等学校 2年生
啓明学院高等学校 2年生
啓明学院高等学校 2年生
桜台高等学校 1年生
報徳学園高等学校 3年生
菫合高等学校 2年生
啓明学院高等学校 2年生

Staff

北川 達也(実行総責任)
西谷 真奈(実行副責任)
室谷 那穂子(会計)
山口 紀子
西井 佐織
小川 祐聖
能島 裕介

関西学院大学 3回生
立命館アジア太平洋大学 1回生
神戸女学院大学 1回生
関西学院大学 3回生
大阪大谷大学 2回生
関西学院大学 1回生
特定非営利活動法人 **BrainHumanity** 代表
(2007年8月現在)

Schedule



6月 22日(金) 参加申し込み締切り
参加者決定

7月 1日(日) 参加者・保護者説明会

7月 16日(月) 第1回勉強会

7月 21日(土) 第2回勉強会
(越井木材工場見学)

7月 28日(土) 第1回募金活動

7月 29日(日) 第1回文化交流会練習

8月 4日(土) 第2回文化交流会練習
第2回募金活動

8月 11日(土) 第3回勉強会

8月 21日(火) 出発

9月 23日(日) 振り返り研修

10月 4日(日) 報告会



Prior Activities



第1回勉強会

第2回勉強会
(越井木材工場見学)

第1回募金活動



第1回文化交流会練習

第2回文化交流会練習
第2回募金活動

第3回勉強会





7.16(Mon)

いよいよ始まったワークキャンプ。この日は第1回勉強会が行われました。ほとんどの参加者が初顔合わせのため、みんな少し緊張した様子でした。

まず初めに親睦を深めるためにデートゲームを行いました。これは2人組になり、与えられたテーマに沿って数分間会話をするというゲームです。

その後、個人の目標を明確にするために目標設定の時間を設けました。ここではまず「マレーシアで私は〇〇になりたい」という成果目標を考えてもらいました。そしてその成果目標を達成するためには、具体的にどのような事をすればいいのか（「そのために私はマレーシアで〇〇をする」）という行為目標を考えてもらいました。成果目標と行為目標という考え方は少し難しいですが、ワークキャンプをより実りあるものにするためにも、すこし頭をひねってもらいました。最後にはこれらを踏まえた上で自分の目標を設定し、全体に向けて発表し決意表明を行いました。

昼食後は貿易ゲームを行いました。これは先進国、発展途上国とに別れ、自分の国の資源や技術を駆使し、商品の売買を通して利益を得ていくゲームです。このゲームでは貿易の仕組みや現実の世界で先進国と途上国の間に格差が生まれていく過程を体験することができ、国際関係についての意識が高まりました。

次は環境問題についての簡単なプレゼンテーションを行い、グループに分かれた後「森林破壊が私たちに与える影響」などを話し合いました。

最後は高校生リーダーを決め、彼女たちを中心に現地での文化交流会の出し物について決めてもらいました。話し合いの結果、エイサーという沖縄舞踊と、コブクロの「桜」、ビートルズの「Hello Goodbye」の2曲が出し物に決まりました。

第1回勉強会

- 10:00 集合
- 10:05 自己紹介
- 10:10 デートゲーム
- 10:45 目標設定
- 11:30 決意表明
- 11:50 昼食
- 12:50 貿易ゲーム
- 14:30 環境に関するグループワーク
- 15:50 文化交流会の出し物決め
- 17:00 解散



~Voice of High School Students~

『環境問題について、自分の意見や考えに納得してくれる人や、自分とは違う、すごく感心できるような意見も聞けて勉強になった。』



『全てが関係していて、どこを取っても同じ問題に突き当たってしまう気がする。上手い解決策なんて見つかるのかな…。』



『今の現状を身近に感じ環境問題や国々との関わりの大切さを感じた。国々との交流を深めてこれからも助け合っていかなければならないと思う。』



7.21(Sat)

第2回勉強会 (越井木材工場見学)

- 13:15 集合
- 13:30 バスで移動
- 13:50 越井木材工場到着
- 14:00 開会
環境問題と木材利用について
のプレゼンテーション
- 15:00 工場見学
- 16:00 クイズ大会
- 16:20 閉会
- 16:30 バスで移動
- 16:40 解散

第2回勉強会のこの日は、私たちがマレーシアでお世話になったコシナール社の本社、越井木材工業株式会社の工場見学へ行ってきました。地下鉄北加賀屋駅に集合し、バスで現地まで行くと社員の方が出迎えてくださいました。

工場見学の前に、まず環境問題と木材利用に関するプレゼンテーションが行われました。「木のよいところは何か」といった簡単な問題から始まり、徐々に「木を伐ることは森林破壊に繋がるのか」といった難しい内容まで、スライドを使って環境問題や植林の意義について詳しく説明してくださいました。中でも高校生たちにとって「木を伐ることが直接森林破壊につながるというわけではない」という考え方は、今までの考えを覆すものであり、衝撃を受けたようでした。

工場見学では二手に分かれ、木材の加工場所と木材に関する研究所を交互に見学しました。加工場所では普段見ることのない、木材がどのように私たちの生活に結びついているかを見ることができ、また研究所では「木を出来るだけ長く利用する」為の工夫について教えていただき、とても興味深い見学となりました。

工場見学の後には、いままで学んだことのおさらいとして、クイズ大会がありました。みんなプレゼンテーションで得た知識と工場見学中に教えていただいたことを思い出しながら、協力して取り組んでいました。

また、マレーシアのコシナール社の紹介もしてくださり、現地でのワークの様子を思い描けたのではないかと思います。この日学んだことによって、植林や環境問題の知識がより一層深まったことでしょう。

~Voice of High School Students~

『いままで当たり前だと思っていた常識が間違っていたのだと気づかされ、新しい発見の連続だった。マレーシア植林ワークキャンプの本来の目的である植林に向けて、決意を新たにしたい一日だった。』

『正しい知識を持って環境問題に取り組むことが本当に大切なんだと感じました。』

『近所の道路に植えてある木はいったい何歳くらいなんだろうって疑問に思いました…。』





7.28(Sat)

第1回募金活動のこの日は、予防接種を受ける日でもあったため今まで一番多くの高校生たちが集まりました。

三宮駅に集合した私たちはまずコムスタ神戸へ移動し、募金の際に使用するパネルのデザインと募金時に呼びかける台詞を考えました。3つのグループに分かれ、第1回、第2回勉強会で学んだことを思い出しながら、どうすればより多くの人にマレーシアの森林破壊について知ってもらえるのかについて注意し、パネルを作成したり、台詞を考えたりしました。

昼食後は予防接種のため置塩医院へ向かいました。過去参加者から「すごく痛い」と聞いていたメンバーや、注射が苦手なメンバーは不安そうにしていたが、意外とあっさり終わり、安心した様でした。

そそいよいよ神戸マルイ前とJR元町駅前に分かれて募金活動を始めました。ほとんどの参加者が募金は初めてで、なかなか要領が掴めず、初めのうちは個人個人がバラバラに呼びかけをしていました。しかし、この状態では何を伝えたいのかがまとまらず、想いが上手く伝わりませんでした。そこで、休憩中にも相談し、改善しました。すると、だんだんと声が揃うようになり、街の人々にもみんなの気持ちが届きはじまりました。徐々に募金してくれる人が増え、小さな子どもが募金してくれたり、励ましの言葉をかけてもらったりしたことで高校生たちは勇気づけられ、最後にはとても大きな声で呼びかけていました。

募金活動を終えた時、高校生たちはとても充実した顔をしており、お金よりもっと大切なものを街の人々からもらったと感じた瞬間でした。

第1回募金活動

- | | |
|-------|--------|
| 9:40 | 集合 |
| 10:10 | グループ発表 |
| 10:15 | 募金活動準備 |
| 12:00 | 昼食 |
| 13:30 | 予防接種 |
| 14:00 | 募金活動 |
| 16:45 | 解散 |



~Voice of High School Students~

『すごい暑かったけど、自分のかけ声を聞いて募金してくれる人がいることに感動して、嬉しかった。』

『顔の厳ついおじさんがタバコを吸いながらやってきてたくさんのお金を入れてくれた時、おじさんがかっこよく見えた。人は見かけで判断したらいけないと思った。』

『駅前で他校の生徒が募金してるのを見たことがあるけど、それはあくまで他人事であって、自分がやってみて初めてその大変さを知った。』



第1回文化交流会練習

- 10:00 集合
- 10:10 アイスブレイク
- 10:30 Tシャツデザインの話し合い
- 11:30 昼食
- 12:50 文化交流会練習開始
- 13:45 休憩
- 13:50 エイサーの練習
- 15:30 歌の練習
- 16:35 解散

この日は初めての文化交流会の練習の日です。まず初めに「I LOVE CAKE」というゲームを行いました。これは二人組になりお互いが紙に書いた言葉を、交互に「それは〇〇ですか?」と質問しながら、当て合うゲームです。

次にメンバーおそろいのTシャツデザインについて話し合いました。それぞれが描いたデザインを持ち寄り、カタログとにらめっこしながら、高校生リーダーを中心に意見をまとめてもらいました。話し合いの結果、ライム色のTシャツの左胸に「I♥GREEN」、背中には「マレー♡」と黒で文字を入れることに決定しました。

昼食後は、瓦木公民館に場所を移し、エイサーと歌の練習をしました。まずはビートルズの「Hello Goodbye」の練習です。この曲は有名なので、原曲を知っているメンバーも多く、また覚えやすい曲なためみんなすぐにメロディーを覚え、ハモリの練習をするまでに上達しました。

そして次はいよいよ沖縄舞踊エイサーの練習です。メンバーの辰巳さんが経験者だったので、先生役を買って出てくれました。DVDを見ながら独特な曲調の「島唄」(エイサー用の「島唄」)のリズムに合わせ、汗だくになりながら練習しました。辰巳さんがとても丁寧に教えてくれたのと、メンバー全員が真剣に練習に取り組んだため、みんなどんどん上達していききました。

最後はコブクロの「桜」の練習をしました。この曲はサビの部分のマレー語で歌うことになっていたため、サビの部分を集中して練習しました。初めて出会うマレー語に悪戦苦闘しながらも、何度も練習するうちになんとかリズムをとることができるようになりました。

~Voice of High School Students~

『マレー語で歌う「桜」は難しかったけれど、現地でちゃんと歌えるようにもっと練習しなきゃって思いました。』

『みんなでおそろいのTシャツを着て、向こうでも頑張ろうと改めて思った。』

『気がつけばみんな汗だくでエイサーを踊ってた。まだ完璧とは言えないけれど、精一杯練習して、これだけのことが出来たことはすばらしいと思う。みんなのおかげで、この日とても有意義な一日を送ることができた。』



8.4(Sat)

この日は第2回目の文化交流会練習と募金活動でした。午前中はまず、前回の募金活動の反省点、改善点などを話し合いました。「どうすればもっと募金してくれるのか」や「安心して募金出来るのか」について募金する立場になって考えました。その結果、「私たちが行っている取り組みを分かり易く伝え、募金したお金がどのように使われるかを明確にする」という意見にまとめ、新しいパネルが完成しました。それと同時に、簡潔だけど相手の心をつかむことが出来るような台詞についても考えました。

余った昼食までの時間は、文化交流会で披露する歌の練習をしました。「桜」のマレー語もずいぶんと上達し、中には紙を見ることなく歌えるほど上達したメンバーもいました。

昼食後は、前回と同じく神戸マルイ前とJR元町駅前に分かれて募金活動の開始です。この日は地元の花火大会が催されており、すごく人通りが多かったのですが、さすが2回目、みんな物怖じすることなく積極的に街の人々に呼びかけていました。新しいパネルと、台詞の効果でしょう。多くの人が募金に協力してくださり、なかには何度も足を運んで募金してくださった人もいました。

また、募金中のメンバーからは「自分たちはマレーシアで植林をするんだ!」という使命感がひしひしと伝わってきました。出発を約2週間後に控えたこの日。募金活動を通じてメンバーの結束も意識も高まり、よい雰囲気の中この日の活動は終わりました。

第2回文化交流会練習 & 第2回募金活動

- 9:40 集合
- 10:20 前回の反省・募金活動準備
- 11:35 文化交流会練習
- 12:05 昼食
- 13:20 募金活動
- 16:00 解散



~Voice of High School Students~

『役割分担したそれぞれの役割ごとに、どんな風にしたら募金してもらえるか、一人一人考え、工夫して動いていた。みんなそれぞれが違う動きをしていて、その一生懸命さが募金活動している仲間それぞれに伝わって、みんなの心が一つになった気がした。』

『学校の友達か、花火大会に行くついでに募金をしにわざわざ来てくれた!!やっぱりいつも一緒にいる友達の励ましは、かなり励みになったし、本当に嬉しかった。』

『今回募金活動をすることによって自分にプラスになることがたくさんあってよかった。』





第3回勉強会

- 10:00 集合
- 10:20 しおり説明
- 12:00 昼食
- 13:00 マレー語講座
- 15:00 休憩
- 15:15 目標設定
- 15:45 休憩
- 15:55 事前振り返り
- 17:00 解散

第3回勉強会であるこの日は、マレーシアに出発する前にみんなで集まる最後の機会でした。これまでの事前活動に参加できていなかったメンバーも揃い、簡単な自己紹介をした後は、ツアーのしおりを見ながら当日の流れや持ち物、諸注意の説明を行いました。現地の宗教や習慣などは、日本とは異なるものも多く、高校生たちは少し驚いている様子でしたが、ティウロン村でのホームステイに備えてとても真剣に説明を聞いていました。

昼食後は、マレーシア人講師アン・アイビーさんを招いてのマレー語講座が行われました。マレー語の発音は普段耳にすることがないので少し難しいようでしたが、先生の話をよく聞いて勉強していました。自己紹介や日常で使われる単語、市場で買い物するときに役立つフレーズなど、しおりに載っていない言葉も積極的に質問する姿が見られました。ちなみに文化交流会で披露する「桜」のマレー語訳は、事前にアイビー先生にいただきました。この日は実際にマレー語で歌ってみて、先生に感謝の気持ちを伝えると共に、発音のアドバイスをいただきました。

マレー語講座の後は、出発直前の目標設定を行いました。ワークキャンプに参加しようと思った初心を忘れないために、また事前活動によって得た考えや知識、受けた影響によってできた新しい目標を自分で整理するためにも、もう一度成果目標と行為目標を設定してもらいました。目標を確認する事で、メンバーの顔も引き締まったように見えました。最後にいままでの勉強会や募金活動、文化交流会の練習などを振り返り、事前活動を締めくくりました。

~Voice of High School Students~

『マレー語の勉強時間はすごく短かったけど、それぞれ言葉の面でも自分の目標が出来たと思った。』

『振り返りシートを書いたことで、自分と向き合った。このキャンプに参加しようと思った時の意欲的な気持ちを少し忘れていたので、初心に戻る事が出来た。ワクワクする気持ちもあったけど、それぞれの目標を達成するためのワークキャンプいうことを、常に心にとめておくことが重要だと改めて感じた。』



Activities on Malaysia



2007年 8月21日

22日

23日

24日

25日

26日

27日/28日



MALAYSIA PLANTING TREES WORK CAMP 2007 SUMMER





いざマレーシアへ!!

- 9:00 関西国際空港集合
- 10:15 チェックイン後、フリータイム
- 11:00 搭乗開始、マレーシアへ
ーこれよりマレーシア時間ー
- 15:40 コタ・キナバル空港到着
- 16:00 三好さんと合流
- 17:00 ホテル到着
- 18:15 ホテル出発、レストランへ
- 18:35 レストランで夕食
- 19:45 ホテル到着
- 22:00 就寝

ついに迎えた高校生マレーシア植林ワークキャンプ2007夏本番。この日のために環境問題について考え、マレーシアについて学び、声を枯らして募金をしてきたこの1ヶ月余り。これまでも大きな変化をみせてきた高校生たちですが、この一週間でさらなる変化をみせることになります。

関西国際空港を飛び立った機中では、メンバー達の興奮は収まりきらない様子でした。約5時間のフライトを経て、とうとうマレーシアの大地に降り立ちました。日本で想像していた常夏のイメージとは異なり、現地はあいにくの雨…。しかし、マレーシアの人々や風景、風のにおいや空気をその目で見て、肌で感じた高校生たちはまるで子どものようにはしゃいだ様子でした。

コタ・キナバル国際空港で、これから一週間お世話になる三好さんと合流した後は、この日の宿泊先であるカジュアリナ・ホテルへ向かいました。三好さんはとても面白い方で、バスで移動する際にはいつも私たちにマレーシアの事について色々なお話をしてくださいました。

ホテルに着いた後は、夕食をとるために近くのレストランへ。マレーシアで初めての食事は鳥の唐揚げのようなものとナシゴレン(炒飯)でした。少し濃い味付けでしたが、メンバーの口にもよく合ったようで、仲間と共に会話を楽しみながら、ゆっくりとした時間を過ごしました。食後には丁度レストラン内でバンブーダンスが行われており、実際に参加し、生のマレーシアを体験したメンバーもいました。

この日は現地に訪れる迄は拭えなかった不安も解消され、マレーシアという異国の雰囲気存分に堪能できた一日となりました。

~Voice of High School Students~

『マレーシアでは時間がゴムのように伸び縮みするという話が面白かった!実際に1時間かかるといっていた道のりが5分で「もう着いた」とか伸び縮みが激しかった。』

『日本では見たことのない草や木、花がたくさん!』

『晩ご飯後のバンブーダンスは初めてで、圧倒されました!』

『空港から出ると、マレーシアのにおいがした。』





2nd day / 8.22(Wed)

2日目は、ホームステイ先であるティウロン村へ向かう日です。この日は朝早くにホテルを出なければならないため、みんなかなり早起しました。朝食は近くの中中華レストランで、三好さんお勧めのコンローミー(中華風付け麺)を食べました。これまた濃い味付けながらも好評で、おかわりするメンバーもいました。

朝食後はバスでボーフォートへ行き、そこからテノムまでジャングル鉄道で移動しました。縦にも横にも揺れる列車の中で高校生たちは、マレーシアの自然の景色を堪能しつつ、文化交流会で披露する歌の練習をしたりして過ごしました。テノムに着いた後はバスに乗り換え、すこし離れたケニンガウという町で昼食をとり、近くのスーパーで買い物をしました。ここではホームステイ先の家族のためにお土産を買う参加者もちらほら。その後長い長いバス移動を経て、予定より少し遅れながらも無事村に到着しました。

テレビで見るような南国の高床式の家が軒並び、自然溢れるこの村にバスが到着すると、私たちは村人総出の暖かい歓迎を受けました。まずは集会所で行われたホストファミリーとの対面式。この日までステイ先が知らされていなかった高校生達は緊張気味でしたが、自分のステイ先が発表され、家族との対面を果たすと緊張もほぐれ、あちらこちらで自己紹介し合う様子が見られました。子ども達は言葉はわからないながらも手を引き、慣れ親しんでくれました。メンバーもそんな子ども達を見て、自然と笑みがこぼれていました。

対面式の後には、集会所でウェルカムパーティーが開かれました。お菓子や現地特有の飲み物であるサバティー(サバ州で採れる紅茶)をいただきながら、これから始まるティウロン村での生活に、メンバー全員が心躍らせていました。

温かい歓迎の下、 ティウロン村に到着!

- 7:00 ホテル出発
- 10:00 ジャングル鉄道で移動
- 13:30 ケニンガウにて昼食
- 14:00 スーパーにてフリータイム
- 18:00 ティウロン村到着
- 18:40 ホストファミリーとの対面式
- 19:00 ウェルカムパーティー
- 19:30 各ホームステイ先へ
- 22:00 就寝



~Voice of High School Students~

『ジャングル鉄道揺れすぎ!けどジェットコースターみたいで楽しい!』



『小さな子ども達や、お父さんお母さんと一人ずつ握手をしていった時には感動でいっぱいでした。マレーシアに来たんだと改めて実感しました。』

『ギターで日本の曲を演奏してくれてかなりうれしかった!!一緒に歌った☆』



『小さい子が、小さい手で握手しながら笑顔で迎えてくれたとき一気に不安なんか消えた!』



いよいよ始まる 現地でのワーク

- 8:30 ティウロン村出発
- 9:00 現地小学校訪問
- 9:15 記念植樹・スポーツ大会
- 11:00 小学校発
- 11:25 コシナール材木工場到着
- 11:30 オリエンテーション
- 13:00 昼食
- 14:00 ワーク開始
- 17:00 ワーク終了
コシナール材木工場出発
- 17:15 ティウロン村到着
- 17:30 夕食・マンディー
- 22:00 就寝

一夜明けた3日目からは、いよいよ現地でのワークの開始です。午前中は村の子ども達とバスに揺られながら、彼らの通う小学校を訪問しました。小学校ではまず、三好さんからトンバック(スコップの様な農具)の使用方法について教わり、校庭に記念植樹を行いました。まだワークが始まったわけではないですが、実際に木を植えてみることでこれからのワークの要領を少し掴めたようです。

その後は、寄贈したサッカーボールを使い、日本対マレーシアのサッカー対決が行われました。日差しがきつい中でしたが、みんな暑さも忘れ、子ども達と駆け回って遊んでいました。

サッカー対決を終えると小学校を後にし、コシナール材木工場へ向かいしました。ここではまず現地駐在スタッフの方から植林についての説明を受け、その後育苗場の見学をさせていただきました。コシナール社が行っているような「産業植林」は、自然林の伐採を抑えるだけでなく、苗木が成長過程で炭素を吸うため地球環境に貢献することができるものです。これらの知識については、日本で学んでいましたが実際に植林をすることで、メンバー達の中で環境問題に対する考え方も変化したようでした。

ステイ先の家族が作ってくれたお弁当を食べた後は、ついに植林の実践です。これまで日本で様々な勉強をしてきた高校生たち。それぞれ色んな思いを抱きながら大事に育てられた苗木を、一本一本大切に植えていました。炎天下の中でのワークは大変でしたが、この日は夕方までに約300本の苗木を植えることができました。帰路時のバス内で高校生たちは、心地よい疲労感と共に、大いに達成感を感じているようでした。

~Voice of High School Students~

『苗は植えることができるようになるまで、何度も植え替えたり、場所を移動させなければなら
ないなんて、育苗は思った以上に大変な作業なんだなあと感じました。』

『この植えた木がちゃんと育っていったらいいなと思いました。』

『植林した!!これが将来成長して、この周りでティウロン村の子ども達が遊んだりしてるんか
なあって考えるとホントに感動した。なんか、うちらがしていることってすごい!!』





4th day / 8.24(Fri)

4日目からは、ティウロン村周辺でのワークの始まりです。午前中はピーター家の畑で、ゴムの木の植林を行いました。ワークの前に高校生たちは、自分たちのワークであることをメンバー同士で話し合い、円陣を組んで「一人はみんなのために、みんなは一人のために」の掛け声で気合いを入れ、ワークに臨みました。コシナール社の植林地とは異なり、雑草がたくさん茂っていたため、畑に植えられている他の作物を踏まないように注意しながら「バラン」という刃物で草刈りをし、その後でゴムの木の苗木を約100本植えました。ピーター家の畑は村から近かったので、昼食は一度村へ戻り、ホームステイ先でいただきました。

午後からは村から少し離れた所にある小道の脇で植林を行いました。ここは午前よりも雑草が好き放題に伸びており、植えることが出来るようになるまでが一苦労でした。みんなで自分の身長よりも高い雑草と格闘しながら整地作業を行い、ここでもまた約100本のゴムの木の苗木を植えることができました。

ワークから帰り、ステイ先へ戻ると真っ先にマンディー(水浴び)です。ホームステイ3日目にもなると、高校生たちはティウロン村での生活にすっかりとけ込んでおり、マンディーだけでなくトイレ、食事などすっかり慣れた様子でした。

村で過ごす間は子ども達と遊んだり、お互いのステイ先へ遊びに行ったり、家族との団らんを楽しんだりとそれぞれがホームステイを満喫していました。この頃から高校生たちの表情にも変化が出てきたように見え、ティウロン村で過ごす毎日には彼らに大きな影響を与えているようでした。

ステイ先の家族と 共同ワーク

- 8:30 ワーク開始
村の畑でゴムの木の植林
- 13:30 昼食
- 14:45 村近くの小道に、
ゴムの木の植林
- 18:00 ワーク終了
文化交流会出し物練習
夕食・マンディー
- 22:00 就寝



~Voice of High School Students~

『自分より背の高い雑草とかありえへんと思ったけど、全員でやれば意外と早く整地できたことに感動でした。』



『あたしたちが休んでるときも、子ども達は手伝ってくれてて、私たちがボランティアに行ったはずなのに、知らない間に人任せになっている自分が情けなかった。もっとがんばらなあかって思いました。』



『植林後のマンディーはほんまに最高やー!!』



迎えたワーク最終日

- 8:30 ワーク開始
- 9:30 村の畑でゴムの木の植林
- 13:00 昼食
- 14:00 ワーク再開
- 15:00 村の畑でゴムの木の植林
- 17:00 ワーク終了
- 17:30 文化交流会出し物練習
- 18:00 夕食・マンディー
- 20:00 現地振り返り
- 22:00 就寝

5日目となるこの日は、とうとうワーク最終日です。午前中は村から20分ほどの場所にあるポールス家の畑で、午後からは村から随分離れたところにあるアンティコー家の畑で、最後の植林作業を行いました。

この日はいつもにも増して日差しが強かった上に植林地までの道のりが遠く、体力的に最も大変でした。しかし、最後のワークということでメンバーは真剣に作業を行っていました。ワーク中にお互いが声を掛け合って協力する姿も多々みられ、植林という1つの体験を共に経験することで、メンバー同士の絆はより一層深まったようです。

私たちが植林をすることで現地の方々の環境に対する意識が少しずつ変化しているように、私たちは大地だけではなく、人の心にも苗を植えたのだと信じています。そしてこの苗が大きくなるのと同時に、人々の心の苗も大きく成長すれば…。そんな想いを胸に、私たちのワークは終了しました。

ワークを終えて村に帰ると、休む間もなくエイサーの練習が行われました。本番を明日に控え、練習するみんなの顔は真剣そのもので、ワークでの疲れも忘れて練習に取り組んでいました。

そして全てのワークが終了したこの日は、村の集会場でロウソクの火を囲みながら、ワークキャンプの振り返りが行われました。忙しい日常を離れ、沈黙の中で自分自身と対話し、考えがまとまった人からみんなに向けて自分の言葉を発表しました。1人1人の素直な想いを伝え合い、お互いにより理解し合えた振り返りとなりました。

~Voice of High School Students~

『一人で植えた苗木の本数はこれっぽちだけど、見渡してみれば私たちが植えた苗木でいっぱいだった。みんなの力が集まれば、すごく大きな力になると感じた。』

『この木が元気に大きく育ちますように。』

『振り返りやってなんかみんな目標とかしっかりしてて、めっちゃ大きく見えてそんなみんなと出会って植林できるって、あたしって幸せなんかもって思った。』



6th day / 8.26(Sun)

6日目のこの日は日曜日なので、ワークはお休みでした。村の子ども達と一緒にバスで30分ほど離れた場所にある、スツクの日曜市場に出かけました。

マレーシア独特の民芸品や初めて見る食べ物にみんな興味津々の様子。高校生たちは、日本の家族や友人にお土産を買ったり、市場の屋台で食べ物を買ったりして楽しんでいました。中でも屋台で売られていた手羽先が大人気で、みんなとてもおいしそうに食べていました。

村に戻って昼食を済ませた後には、村の方々が家族対抗のスポーツ大会催してくれました。ヤシの実をボールに使い、砂の入ったペットボトルを倒すカンボンポーリングや藁袋に入り飛び跳ねて進むリレー、日本対マレーシアのバレーボール対決など、家族みんなで楽しんでいました。

そして夜はフェアウェルパーティー。お互いの文化を認め合うために、そしてお互いのことをずっとずっと忘れないでいられるように、心を込めて出し物を披露しました。私たちは「Hello Goodbye」と「桜」を歌い、エイサーを踊りました。高校生のみんなはこの日のために、現地に來てからも毎日のように練習してきました。その甲斐があって、歌も踊りも大成功し日本の文化を伝えることが出来ました。そしてティウロン村の方たちの中で、私たちの思い出は消えることなく輝き続けるはず。出来るならこの時がずっとずっと続いて欲しい。誰もがそんな想いを抱く中、ティウロン村の最後の夜は更けていきました。

村で過ごす最後の夜

- 9:30 ティウロン村出発
- 10:00 スツク市場にてお買い物
- 13:30 昼食
フリータイム
- 16:00 スポーツ大会
文化交流会出し物練習
マンディー
- 19:00 フェアウェルパーティー
文化交流会
ホストファミリーとの離別式
- 23:00 就寝



~Voice of High School Students~

『日曜市場では、ホストファミリー全員にお土産を買いました♪』



『本当に今日で家族と過ごせる最後の夜だと思うとつらくなる。いままでこんな思いしたことないのに…。』



『日本には絶対にできない経験をさせてもらった。絶対、日本の友達に伝えていきたい。』



帰路、日本へ

- 8:30 ティウロン村出発
- 12:30 峠の茶屋で昼食
- 16:20 コタ・キナバル市内で
ショッピング
- 18:00 コタ・キナバル空港到着
- 19:30 クアラ・ルンプール空港へ
- 22:45 空港内フリータイム
- 23:45 クアラ・ルンプール空港発
関西国際空港へ
- 7:15 関西国際空港着
- 8:00 解散

とうとう訪れた最後の朝。楽しかったティウロン村での生活ともこの日でお別れです。初めてこの村に来たときと同じ様に、村の方々が総出で、私たちを見送ってくれました。一人一人と握手を交わし、最後まで別れを惜しみました。伝えたいことは沢山あるけれど、「Terima Kasih(ありがとう)」としか伝えられません。しかし、言葉は分からなくても同じ人として通じ合えたということをメンバー全員が痛いほどに感じていました。バスが見えなくなるまで手を振る家族に最後の別れを告げ、私たちは一路、コタ・キナバル国際空港へと向かいました。

長い長いバスでの移動。すすり泣く声が寝息に変わった頃、コタ・キナバル市内を一望できる峠の茶屋に到着しました。ここで最後のマレーシアでの食事を済ませ、再びバスでの移動。空港に着く前に市内のショッピングモールで買い物を楽しみ、その後バスを乗り換え、コタ・キナバル国際空港へ到着しました。ここで、7日間お世話になった三好さんともお別れです。

その後はコタ・キナバル国際空港からクアラ・ルンプール国際空港を経由し、28日の朝、関西国際空港に無事到着しました。

解散前に全員で円陣を組み、ワークと時と同じく「一人はみんなのために、みんなは一人のために」の掛け声でワークキャンプの最後を締めくくりました。

再会を約束して帰路につくみんなの姿は、一週間前に空港でみたときよりも一回りも二回りも大きく、たくましくみえました。

~Voice of High School Students~

『この村で過ごした数日間はいつものみんな笑顔で、本当の家族のようでした。』

『たった5日間という短い期間に、私たちは人の温かさに触れ、自然の大切さを改めて知り、暑い中一生懸命植林活動をして辛いときやしんどいときもみんなと団結して、ひとつひとつのことをやり遂げることが出来ました。』

『私たちは一人では小さな事しか出来ないけど、こうやってみんなと集まると小さな事でも大きくなって達成できる。答えなんか無いけれど、人間は支えあってこそ人間だと、ということを見つけた。』



After Activities



振り返り研修

ワークキャンプ報告会



MALAYSIA PLANTING TREES WORK CAMP 2007 SUMMER





振り返り研修

13:00 集合

13:10 アイスブレイク

13:40 振り返り

15:00 休憩

15:10 報告会について

16:45 解散

マレーシアから帰国してから約3週間が経ったこの日は、振り返り研修が行われました。久しぶりに集まったメンバー達でしたが、懐かしい気持ちはあるものの、まるでいつも会っている友人であるかのように、マレーシアでの思い出話やお互いの近況報告などで盛り上がっていました。

まず初めは、ワークキャンプを漢字一文字で表すという、一見簡単ながらも奥の深い問題について考えました。これは自分がワークキャンプで受けた最も大きな影響を考える問題で、これによって自分にとってワークキャンプはどういうものだったかを知ってもらえたかと思います。

次に、事前学習から現地までの活動に自分はどのように関わってきたか、何を感じ、何を得ることが出来たのかを詳しく振り返りました。大きな影響を受けたことは勿論ですが、些細な事でも影響を受けたことについては振り返り、自分の成長に繋がりました。振り返りを通じて、自分にどのような変化があったのか発見することができ、また他のメンバーの意見によって新しい気づきもあり、有意義な時間を過ごせました。最後は、今回の経験を通してこれからどうしていきたいかについて考えをまとめ、一人ずつ発表しました。

休憩後は、ワークキャンプ最後のプログラムである報告会について話し合いました。自分たちの活動を多くの人に知ってもらい、また応援してくれた家族や友人に感謝の気持ちを伝えるためにはどのような報告会にするのがいいかについて真剣に考えました。そして当日の役割である、司会、行程スライド担当、ディスカッションについての担当も決まり、報告会に向けてよい雰囲気ができあがったところでこの日の振り返りは終了しました。

~Voice of High School Students~

『久しぶりにみんなと再会したけど、なんか全然離れてた気がしない。なんだかこのメンバーはすごい落ち着く。こういうのを絆っていうのかな。』

『このワークキャンプをゴールではなくスタートにするためにも、今日の振り返りで自分を客観的に見つめなおすことが出来てよかったと思う。』

『マレーシアでの活動を振り返ってみたときに一番出てくるのはやっぱり「笑顔」。ティウロン村でもらった幸せをみんなにも分けてあげるためにも、笑顔を大事にしていこうと思った。』





11.4(Sun)

振り返りから少し日をまたいだこの日は、ついに「高校生マレーシア植林ワークキャンプ2007夏」の報告会が行われました。高校生たちは久々の再会を喜びながらも、よりよい報告会にするためにみんな真剣にリハーサルを行い、準備を整えました。

報告会では事前から事後までの全ての活動を、写真と共に報告する「行程プレゼンテーション」、「環境問題」「自分の変化」「異文化」などのテーマに沿って、高校生自身が感じたことを自由に話し合う「ディスカッション」、高校生がワークキャンプで思ったことを自由に発表する「個人スピーチ」を行いました。これらを通して、参加者自身の成長や環境問題の深刻さ、保護者の方々をはじめ自分たちの活動を応援してくれた方々への感謝の気持ちなどが伝わったのではないかと思います。

スピーチの後は、ワークキャンプのこれまでの活動を、高校生自身が何を考え、何を学び、何を感じていたかなどを、日記などを元に作成したスライドの上映が行われました。

ワークキャンプ報告会は参加高校生達の活動の締めくくりでもあり、自分たちが辿った軌跡を発表する場でもあり、また始まりの場でもあります。ワークキャンプを通じて得た想いをただ思い出として残すのではなく、未来へ繋げる架け橋として前へ進もうとするみんなは輝いてみえました。これからは舞台をマレーシアから世界に移し、それぞれの道で活躍してくれることでしょう。

ワークキャンプ報告会

- 10:00 集合
- 10:30 リハーサル開始
- 12:00 昼食
- 12:45 開場
- 13:00 開会
理事長挨拶
行程プレゼンテーション
ディスカッション
休憩
個人スピーチ
スライド上映
実行総責任挨拶
- 16:15 閉会



~Voice of High School Students~

『スライドの写真みて、子ども達の笑顔もそうやけど、うちらもあんなに笑ってたんやなあって思った。』



『マレーシアでの思い出は、自分の中でめっちゃでかい存在になってる事に気づけた。みんなには「ありがとう」以上の「ありがとう」を贈りたい!!』



『これから先は、みんなと会える機会が少なくなるけど、みんなとの絆はずっと続いてくと思う。またみんなと会える日が来るのを心から楽しみにしています。』

Member's Impressions



参加高校生感想文

スタッフ感想文



MALAYSIA PLANTING TREES WORK CAMP 2007 SUMMER

参加高校生感想文



ADACHI RYOKO
足立 涼子

ありがとう以上の
言葉が見あたらない

一週間、マレーシアへ行ってきた。

正直最初は「めんどくさい」って気持ちもあったけど、今は行ってほんまによかったと思う。初の海外ってのもあって見るもん全部が不思議で、特に食べ物は最初食べるんめっちゃ勇気いった。

2日目からはティウロン村でホームステイ!もうなんか何書いていいかわからんくらいにたくさんのことがおこって、明日が来るのが楽しみで、今思ったら毎日が幸せやった。最初の植林地やったところが何か殺風景な感じやって、でも空が向こうの方まで見えてめっちゃ広く思えてなんか感動した。日本は建物ばっかで狭いからこんな風景みたことなかった。草がわっさわっさ生えてる場所も別にそこまで嫌じゃなかったし、国や環境がちょっと違うだけで同じモノの見方がだいぶ変わるんやなあって実感した。

村の人達は何をするにもうちらを優先してくれて、自分より小さい子達も気遣ってくれてるのがすごい伝わった。あの子たちからしたら、当たり前なのかもしれないし、大したことじゃないのかもしれないけど、何よりその気持ちがあったかくてほんまに嬉しかった。でも尽くしてくれてるからってそれに甘えてる自分がいて、ほんまに情けなかった。自分にできることをしたいからこのツアーに参加したのに、自分にできることを人にやらせるとかまぢでおかしいよな。ここに来る前までもそうやったし、あかんて気づいてた。マレーに来て自分がめっちゃ他力本願なんが改めてよく分かった。

最近意識しなくなっただけど、やっぱり笑顔は大切なんやなって村の人達見ててすごい感じた。子供にしても大人にしてもみんないつも笑顔で接してくれて、ずっと笑ってた。この一週間笑ってなかった時の方が少ないんじゃないかってくらい。何があるわけじゃないけど、どこにいてもみんながいて、帰ったら家族が待っていてくれて、人と居ることがすごく楽しくて、めっちゃめっちゃあったかくて、やっぱりうちは人が好きなんやって思った。日本にいたら、今じゃ一人でご飯食べるのなんか普通やし、家に帰っても誰もいないことの方が多いし、家族やけど家族らしいことなんかいつもなくて、みんなで食べることとかママが

作ってくれるご飯も全部全部大好きやった。

みんないつもわいわい騒いで遊んでるけど、しなきゃいけないことちゃんと知ってて、相手を思いやる心もほんまに強いと思う。植林やってうちら以上に働いてた気するし、うちらが困ってたらすぐに来てくれて助けてくれる。そういう気持ちは日本人より絶対に強い。温暖化を防ぐために木を植えることも大事なことで、まず目の前のことをしっかりしなあかんよな!

ティウロン村で生活して、うちにとって一番でかかったんが人間の良さを知れたことかな。うちがティウロン村でもらった笑顔を誰かにもしてあげたい。悩んで考えることも大事やけど、そればっかじゃ絶対おもんない。無理に笑えってわけちゃうけど、やっぱり楽しいのが一番いい。笑顔で、頑張るときは頑張ってしっかり生きてたら、絶対その分の笑顔がかえってくると思う。

日本に帰ってきて、道路が綺麗で、電気はいつでもついて、トイレは水洗で、当たり前だった生活がすごく不自然で、何でも揃ってて、またそれに甘えそうな自分が怖い。この気持ちを忘れないでいることが環境変えていく第一歩なんちゃうかなって思った。これからは自分にもっと厳しく生きていかな。

とにかく幸せな一週間やった。ありがとう以上の言葉がないのが残念。この幸せな気持ちをもっとたくさんの人に味わってもらいたい。村の人達には今以上に幸せになってもらいたい。そのことを心から望みます。

ひとりみんなのために

みんなはひとりのために

お互いを思いやる気持ちがあればどんな環境でどんな国でもみんな幸せになれると思う。大切な心をありがとう。

Terima Kasih!!

これからの人生にこの経験を存分に活かして生きていきたいと思います。スタッフのみなさん、協力して下さったみなさんに本当に感謝します。ありがとうございました。

ABURATANI MAI 油谷麻花

学びと願い



日本から飛行機で5時間、バスで2時間、鉄道で2時間、さらにバスで2時間行ったところにティウロン村はあった。現在の日本で文明と呼ばれているもののほとんどがないその村に、私たちはこの夏滞在した。現地の人々とのコミュニケーションにおいて多少の不安を抱えながら村に到着した私であったが、そんなことは村の人々の明るさにすぐ吹き飛ばされてしまった。暖かな歓迎の中で、すぐに打ち解けることができた。子供たちは元気と笑顔に溢れ、大人の人々はいつも親切で仁愛を持っていた。それでもやはり、自分の意思を伝える、また、相手の意向を知る上で、言語は重要だと、一日目二日目、切に感じずにはいられなかった。同時に、自分の武器となる、この言語という学問をもっと習得しなければならないと思った。しかし、三日目四日目と時間が過ぎるに伴い、自分の考えに付け加えるべき点があることに気が付き始めてきた。それは目線の重要性だ。どんな人も目を合わせると、笑顔を返してくれる、手を振ってくれる、名前を呼んでくれる、冗談を言ってくれる。目を合わせなければ、そこから何も始まることはない。つまり、人と人との関わりの中で、もし仮に言葉より大切なものがあるとしたら、それは目であると私は思う。それに気付いたとき、自分の前にあった壁が、自らが作り出していた壁が、不意に消えた。どちらか一方だけではなく、互いの積極性があれば、何かを伝え合ったり、作り出したりすることが出来ると、今は本気で思う。

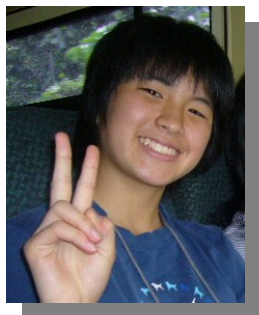
マレーシアでの生活が永遠に続くかのように思っていた私は、帰国後、今までの日常に戻り時を過ごす自分が、どこか受

け入れられなかったり、腑に落ちなかったりしていた。しかし、前に進むために今回のワークキャンプに参加したことを思い出した。あの村で出逢った緑の色や、風のおいしさ、雲の流れや、涙の味や、命の力は、自分の定規では測りきれない幸せの形があるのだということ、私に気付かせてくれた。非常に短くも、非常に長くもあった今回のワークキャンプの中で、私は他にもたくさんのものを得て、学んだ。

時を基準に生活しつつ、時に追われ、自分の内面や周りの環境にゆっくり向き合うことが出来なくなっていること。物事の外面だけを見てすべてを見た気になり、本来の姿が曇ってしまっていること。状況や理由に関係なく、人は傷つけられた心を持ち続けるし、暖かなことには感謝し続ける。ゆえに、どんな場合であっても、後に起こりうることを思案し、慎重に行動しなければならないということ。答えのない問いが存在すること。そして、答えのない問いに屈することなく挑み続けなければならない、ゴールがなくとも挑み続けなければならないということ。だから私は進み続ける。高校生として、今しなければいけないことを、全力でやろうと思う。そして今は、この感想文を書ける喜びに浸ると同時に、今回のワークキャンプに関わったすべての人にありがとうを伝えたい。

最後に、ワークキャンプが、一年後も、二年後も、百年後も、ずっとずっと続いていきますように。ティウロン村にずっとずっと光が降り注いでいますように。

私は、あの子たちの笑顔を忘れない。



INUKAI YUKIKO 犬飼人智子

マレーシアキャンプ

不安、緊張と希望を抱いて私はこの植林活動に挑みました。最初は見知らぬ人達の中で疑問が浮かびました。「このメンバーの中に溶け込めるかなあ?」そんな疑問を吹き飛ばすかのように、一緒に時間を過ごすと思わず知らずの内に溶け込めて

いました。そんな、仲間と一緒に勉強会で集まって、募金で集めたお金で苗を買って、マレーシアで植えるんだと考えたら植林に対してやる気が出ている自分がありました。部活以外の事でやる気が出て、燃える事があまり無かったのでとても嬉しかった

待ちに待った出発の日、自分でも分からないけど嬉しすぎて緊張していました。飛行機に乗って、マレーシアに到着して第一印象は全く違う国に居るにも関わらず、どこかメキシコに似ていると思いました。早速トイレに行ったら、トイレの水が流れない。来て直ぐにカルチャーショック。気を取り直して再挑戦、今度は脇にあったシャワーで流すつもりが、水を貯めることになってレバーを今度は長く押したらやっと流れました。次の日はティウロン村にバスとジャングル列車に揺られて着いたのは夕方日本では考えられない程寝ていた自分にビックリしました。三日目は現地小学校で記念植林を二本植えて分かった事は、意外と穴を掘る作業は難しいことでした。まだ植林初日の内は掘ることはキツくなかったです。草を刈ってから植えるのには体力が衰えている体には休息を求めているのは分かっていたけど、他の人もそれは一緒のことだからと自分に

言い聞かせて頑張って植林を続けました。植林の他にエイサーの練習は、勉強会で覚えようとした時よりもすぐに覚える事が出来たので、「人間毎日少しでも練習したら覚えられるのかなあ」と思いました。そして、あっという間にフェアウェル・パーティになってしまいました。マレーシアで接してくれた人達の全員の優しさや思いやりが現地の子供達が歌ってくれた好きなスピッツの「空も飛べるはず」を聞いて、一気にこみ上げて来て、自分でも情けないぐらい号泣してしまいました。このまま残って、日本に帰りたくないと言う気持ちが大きかったので自分でも驚きましたが、友達とまた来ようと約束しました。

この活動で言い表せない位、良い体験をしたと思います。これからは、この体験を忘れずに自分が今日本で出来ることをして行きたいと思います。

OTA KANA 大田佳那

高校生最後の夏



高校生最後の夏。私はどの高三の人より、価値があり、輝いた夏を過ごしたと思う。

たくさんの不安を胸に抱え、参加を決めたワークキャンプ。高三の夏は思ってた以上に忙しくマレーシアに行くまでに、不安を消すことはできなかった。そして、いつの間にかマレーシアでの生活が始まった。

ティウロン村に着いたときみんなの笑顔がまぶしくて“帰ってきたんだ”という実感がわいてきた。ステイ先の家族は私を当たり前のように迎えてくれた。みんなが“KANA”と呼んでくれる。それが嬉しくてしょうがなかった。

植林ワークキャンプでは、いろいろな種類の木を植えることができた。一本一本自分たちの手で植えた木は、数えられるほどだったけど、それがいつかティウロン村の生活を支えられたらいいと思う。このワークキャンプは“ボランティア”だけれど、私は逆にたくさんの経験をさせてもらった。私が与えたことより与えられたことばかりだ。植林もやってあげたのではなく、させてもらって、助けてあげたのではなく、支えられて…。何よりも、村の子ども達の笑顔にはいつも支えられた。疲れたなんて感じることなく、毎日一緒に遊べるのが、本当に楽しかった。世の中に、何も嫌なことがないような幸せそうな顔をする子ども達を見ていたら、自分がどうしてもわがままに思えて、恥ずかしくなった。電気もなく、水も雨水で、楽な生活ではないはずなのに、私よりも幸せな顔をしていて、私までも幸せにしてくれる笑顔だった。私もあんな人を幸せにできるように笑っていたいと思った。

マレーシアに来て、いつの間にか不安は消えていた。村の人たちと、メンバーと一緒に過ごしている時は毎日が充実していて、日本で悩んでいたことが、どれだけ小さなことが気がついた。帰ってきた今、にわたりの鳴き声で起きて、ママのマカンを食べ、メンバーと植林して、村の子どもと遊んで、歌をうたって、家族で過ごして…という時間はなくなってしまったけれど、日本でもがんばろうと思える私がいる。生活は全く違うけれども、だれだって、どこだって、自分次第で幸せに過ごせると思う。だから私は、ティウロン村の子ども達に教えてもらった笑顔忘れずに、毎日過ごしていこうと思う。

本当にたくさんのひとにありがとうを言いたい。

お父さん、お母さん、二回目のマレーシアに行かせてくれてありがとう。マレーシアで変わった私をこれからも見てて下さい。スタッフのみなさん、いつも支えてくれてありがとう。私たちのために、気を配って、自分のことは後回しで考えてくれてありがとう。私たちは、スタッフのみんなのおかげで充実したワークキャンプにすることができました。メンバーのみんな、一緒にアホみたいに笑ってくれてありがとう。一週間、一番近くにいたメンバーのみんなは、本当にかけがえのない仲間です。みんなと一緒に行けてよかった。そして、ティウロン村のみんな、家族のように受け入れてくれてありがとう。ティウロン村で過ごした一週間は本当に幸せでした。

私は今、胸を張って言えます。

高校最後の夏は、最高の夏でした。



OKAMOTO HANA
岡本華

マレーシア感想文

朝マレーシアにいた時間に目が覚めた。朝は少し寒くてにわとりが鳴いて、子供達は朝から元気で、ママが「マカンツ」って呼んでくれて、外出ればみんないて、ヒルトン達がギターでスピッツとか、日本の歌を歌ってくれて、子供達と群れて、植林して汗かくけどそのあとのマンティーは最高で、ママのごはんはおいしくて必ず家族団欒の時間があって夜もヒルトン達がギター弾きにきてくれて、片言の英語と日本語とマレー語でしゃべって笑って疲れてぐっすり寝れる。そんな一日があつた時は何も思わなかったけど、こんな充実した人間らしい生活ができる一日ってないかもしれない。

手紙を書いた。会えないから手紙でしか気持ちを伝えられない。会いたい。満足して帰ってきたけど、心残りがいっぱいかもしれない。一週間じゃ足りない。あたし達は物も手にはいるし、便利な生活を送ってるのに、なんでこんなに不満をゆうんやろ？なんでマレーシアの人達は、あんなに笑顔なんやろ？た

ぶんほんまに気持ちがいっぱい埋まるんは欲じゃないんやろな。人間楽しいし、欲もある。そういう環境で暮らしてたら全てが当たり前になって、大事なこと見失いやすいかもしれない。

今回植林したけどどちらがしたことですぐ地球が変わる訳じゃないけど、何もしないのとするのは全然違うし、積み重なったら変わるって信じたい。

マレーシアで植林したことであたしはたくさん救われたと思う。ボランティアをしてあげたっていう気持ちは全然なくて、むしろ感謝の気持ちでいっぱい。マレーシアは私に決心する勇気をくれた。夢をくれた。今それに向かって頑張ろうって思う。

マレーシアは生きていると実感できる原点だと思った。毎日忙しい中で大切なことを見失わないように、マレーシアで感じたこと、見てきたことを忘れずに毎日生きていこうと思う。マレーシア大好き。

KITAYAMA MIO
北山三零

一週間のマレーへの旅



マレーシアの人達の笑顔はあまりにも眩しかった。私は、この夏マレーシアへ一週間の植林ボランティアへ行ってきました。もともと引っ込み思案の私がなぜこのようなボランティアに参加しようと思ったかという、私は昔から環境問題に興味があり、年々刻一刻と状態が悪化している地球に「今、自分には一体何ができるんだろう。」と思ったからです。なかなか応募するのに勇気が出なかった私の背中を押してくれたのが、この植林活動に去年参加した私の先輩の一言でした。「絶対に一生の思い出が出来るから一緒に参加しよう。」私はマレーシアへ行く決心を固め、小さなティウロン村へ行くことになりました。そこでの生活は日本では考えられないほど質素な暮らしで、最初は戸惑うことも多々ありました。でも、ティウロン村

で暮らす人々は本当に皆が心の底から笑っていて、気づけば私もたくさんの元気を彼らからもらっていました。実を言うと、私はティウロン村へ行くまで小さい子が少し苦手で、仲良くなれるか心配でしたが、村の子供は皆とても可愛くて、私たちに優しくなついてくれたのでいつの間にか大好きになっていました。村には見渡す限りの自然が広がっていて、そこには空を隔てるものがほとんどなかったので、空がとても高く感じました。植林活動は、たくさん歩いたり、すごく暑かったり、木の苗が重くて運ぶのが大変だったり、穴を掘るシャベルが日本のものと違って扱いづらかったりもしましたが、村の人や仲間に支えられ、無事にたくさんの木を植えることができました。ここでも、たくさんの人の優しさを感じて、本当に幸せを感じました。きつ

と、私たちがやったことは地球規模で考えたら本当に小さな出来事だろうけど、私の中ではとても大きな変化でした。

日本は今環境問題に対して様々な取り組みをしています。でも、果たして日本人一人一人はそれらのことにきちんと向き合っているのでしょうか。環境問題などの大規模なものは、国民全員が意識し、改善していかないと意味がありません。ごく一部の人が頑張っても大きな力は発揮できないのです。年々暑くなる夏。通常では起こりえない異常気象。自分達の肌でも感じるほどにこれらの問題は深刻になっています。これはきっと、地球が放っている最後の警告でもあり、叫びなのです。先ほど言ったように、私たちが行った植林活動も本当に小さなことでしかありません。でも、日本に帰った今、このことを少

しでも多くの人に知ってもらおうことが私の使命だと思っています。

私が思い、考え、体験したことが未来の地球、また未来の若者に繋がっていけばよいと私は思います。また、マレーの人達の笑顔の灯を消さないように。物質的に恵まれていることが幸せでないと分かったし、マレーの人々の心の豊かさを様々な面でとても感じました。絶対に、また私はティウロン村へ帰ります。そして、23人のマレーメンバー、7人のスタッフに出会えたことを本当に心の底から幸せに思います。いろんな意味で、たくさん成長できた最高の高2の夏休みでした。全ての人にトゥリマカシー!!!!



KIHARA SHINO
木原志穂

ワークキャンプに参加して

私は今回参加する前まで、日々の物事に関心を示すことが少なく、諦めがはやく、何かと人任せになっていることが多い毎日、これが自分の性格なんやと自分で思い込んでいた。でも植林の時、たくさんあって前が見えなかった雑草を諦めずに刈って行くことで、向かいで草を刈っている友達の姿が見えてきて、その友達と向かい合って笑えた時、頑張ってたかたになって、素直にそう思えた。これが自分の最大だと思い込んでいた力を、自分自身と向き合って諦めずにもっと振り絞ることによって、向かいで笑いかけてくれる友達と、新しい自分に出会うことができたんだと思う。

私は今回キャンプに参加して、植林の他にも自分自身と向き合う機会がいっぱいあって、その度に逃げずに新しい自分と出会えることが出来てほんまに良かったと思う。植林自体は地球規模で考えるとすごく小さなものかもしれない。でも私は自分からこのワークキャンプに参加して、みんなと植林が出来

て、少しでも力になれたことが嬉しい。

ホームステイは11人家族という大家族の中で、一人っ子の私は最初とても戸惑った。でも家族の優しさ、明るさのおかげで楽しく過ごせた。言葉に苦労することはあったけど、その度に兄弟が教えてくれたり、一緒に笑ったりして、嫌な思いをしたことは一度もなかった。全くの他人を暖かく受け入れてくれた村の人たち、家族には本当に感動した。

今回のワークキャンプや、みんなと過ごした毎日を、この先ただの思い出にはしたくない。見たこと聞いたこと触れたこと、あのときの自分を絶対に忘れずに、日本でも生かしたいと思う。今回の経験は自分にとってすごく自信になったしこれから何かに挑戦するときも、きっと背中を押してくれると思う。またあの村に戻ったとき、自信をもって「ただいま」と言えるように今の自分をもっと輝かせたいと思う。

KUSAKA MINAMI
日下みなみ

自分が変わったマレーシア

私が今回のワークキャンプに参加したきっかけは「今までの自分を変えてみたい。」と思ったからです。

私は小さい頃、体が弱くて入院ばかりしていました。学校に行っても、勉強も体育も、全然みんなと同じようにできなくて、

いつもしょんぼりしていました。大きくなって、体は丈夫になったけど、心はどんどん弱くなって、5年生から中学を卒業するまで、1度も学校には行かず、ずっとフリースクールに通いました。けれど、高校に入ってからたくさん友達もできて、毎日



笑って学校に通えるようになりました。

ワークキャンプの事を知った時、こんな私でも少しは、人の役に立つことができたらいいな、いろんな人と仲良くなれたらいいな、もっと自分が変われたらいいなと思いました。でも、本当はマレーシアに行くまで、ご飯は食べられるかな。とか、知らない国でちゃんと生活出来るのかな。とか、不安でいっぱいでした。でも、いざマレーシアに行くと、沢山の優しい方に出逢いました。現地の皆さんが笑顔で出迎えてくれた時、凄く嬉しかったです。植林も、かなり暑かったけど、皆の助けで沢山の苗木を植える事が出来ました。休んでしまった日もあるけど、心の中は凄く充実した日々でした。お風呂(マンティ)は電気がないため真っ暗でしたが、働いた後のマンティは気持ちよかったです。トイレをする時は暗くて怖かったです。(笑)家の中では、子供たちと一緒にDVDを見たりして楽しい毎日を過ごしました。皆、なついてくれて凄く嬉しかったです。マレー語は、最後まで全然覚えられなくて悲しくなりました…。でも、片言の日本語や英語で話しかけてくれたので、少しはなんとか、答え

る事ができました。それに、言葉は通じなくても、相手の伝えたい事が少しだけですが分かる事もあって、心は通じるんだなあと思いました。

エイサーの練習では、皆に迷惑を掛けてしまいました。なかなか覚えられない私に、一生懸命教えてくれた友達に心から感謝します。それから…ごめんなさい。

本番では、想像していたよりも上手く出来て嬉しかったです。皆とエイサーを踊れて良かった。と思いました。沢山の拍手に泣きそうになりました。「桜」をマレー語で歌った時も「Hello Goodbye」を歌った時も、沢山の思い出が頭に浮かび、泣きそうになりました。

マレーシアから日本へ帰る日…。自分でも驚くくらい号泣していました。子供やお母さんたちの涙を見たら我慢が出来なくなりました。お世話になった皆さんに「ありがとう」と伝えたい。心からの愛を込めて…。



SASAKI SAYAKA
佐々木彩華

自信を得たマレーシア

今、この感想文を書いている私は、すっかり日本の生活に戻り、毎日を過ごしている。毎日慌しく、時間に追われる日々だ。でも心の中は、マレーシアに戻りたい気持ちでいっぱいだ。マレーシアから帰ってきて、こんな気持ちになるとは思っていなかった。それほど、この7泊8日のマレーシアでの経験は、私に大きな物を与えてくれたのだとつくづく思う。

私は、ボランティアに興味があり、このキャンプに参加した。でも、初めての海外、ホームステイだったので、内心すごく不安だった。でも、村に着いて、みんなと握手したとき、たくさんの笑顔で、少し安心した。その後のホームステイ先の家族との対面も本当にドキドキした。でも、家族の皆さんに温かく声を掛けてもらい、この時点で、本当に安心した。まだ名前の自己紹介も出来ていない状況だったのに、家族の小さい女の子がわたしの手を引いて、席に案内してくれた。ほんの数分間ですっかり打ち解ける事が出来た。

翌日からの植林活動は、暑さと長時間が重なり予想以上にきつかった。私の植林活動中の目標は、みんなに一言でも声を掛けることだったので、その目標を頭に入れて、作業した。一日目は、自分に精一杯な部分が多く、なかなか出来なかった。でも次の日からは、積極的に声掛けをした。すると、チーム内でしんどそうな子や作業がなかなか進んでいない子に声を掛け、みんなで手伝うという仲間意識が、すごく高まったように思えた。みんなでカバーして、みんなで作業を終えた時、すごく気持ちの良い達成感を得ることが出来た。長い間味わってなかった達成感だった。私たちが植えた木が大きくなると、そ

の木を収入源にしていくことができる。ほんの少しのお金にしかないけど、私は大きなことをやり遂げたという誇りをもつことが出来た。誰かのために、何かをすることは、大きな自信になると再確認できた。

作業が終わり家に帰ると、すぐに家族の誰かが「マンディー」と声を掛けてくれた。私達が作業から帰ってきてすぐに入れるように、待っていてくれた。食事もいつもは質素な生活をしているのに、私たちの為に、豪華に振舞ってくれた。毎日、村のどれかのひとと触れ合うたび、温かい優しさを感じた。本当に、みんなが心の底から優しくかった。そしてみんなが笑顔だった。電気やトイレなど、日本より不便なはずなのに、みんな笑顔だった。停電が起きたときもろうそくを灯して、みんなと笑顔でご飯を食べた。私自身も不自由とを感じるが多かったはずだったのに、毎日笑っていた。村の人たちの温かさが大きすぎて、全く不自由だと感じなかった。本当に温かかった。言葉の壁も心配だったが、何とか通じた。やはり伝えようとする気持ち次第だと思った。

日本に帰ってきて、村の人たちの声が聞けないと思うと、一気に寂しくなった。でもこの経験を今後どう生かすかが大切だ。環境問題を実際目の前にして、自分に出来ることをこれからもやっていこうと思った。このキャンプがきっかけで、国際ボランティアに興味が出てきた。なかなか海外には行けないが、日本でたくさんボランティア経験を積んでいきたいと思う。

SHIOTANI AKIKO 塩谷晶子

マレーシアについて

いろいろなことがたくさん学べた一週間でした。行く前は「植林」やから、「木」のことについてとか「環境」のことを中心に学ぶと思ってたけど、実際、行ってみて、それよりも他にもっと大切なものを学んだような気がします。それは、マレーシアの人たちの温かさや優しさに触れた時に感じました。違う国の人間である私たちを温かく迎え入れてくれて、毎日ごちそうを用意してくれ、家族同様に接してくれる。すごく嬉しかったです。便利な日本で暮らしている私たちからしてみれば、あの村での生活は不便かもしれないけど、その中で村の人たちは、一生懸命毎日を生きていて、みんな心が豊かでした。私は、「たとえばお金をたくさん持っていて心が豊かでなければ、きっと人間は本当の幸せにはなれないんじゃないか」とそう感じました。植林ワークでは、マレーシアの農業について学べました。やっぱり国によって土も気候も違うからその国によって育つ作物には向き不向きがある。学校でこのことを習い頭では理

解してたけど、実際ワークを行い、土に触ったりして、そのことを目の当たりにしました。そして、人々の食料を供給する農業というのは、どこの国でもすごく大切なことなんだということに気づきました。今、日本では、農業が衰退していきつつあるなかで、私は改めて農業の重要な役割を改めて気づけて良かったと思います。マレーシアで一週間滞在し、人との出会いがこんなにも嬉しくて、楽しくて、幸せなんだということを新たに発見しました。それはマレーシアで出会った人たちはもちろんやけど、一緒に植林をし助け合い協力しあった参加者のみんな、一生懸命に私たちを支えてくれたスタッフのみんなもです。これから生きていくなかできっといろんな人に出会おうと思います。そのひとつひとつの出会いを私は大切にしていきたいです。私にとって、マレーシアで過ごしたあの一週間は一生の宝物です。



SHIBATA TOMOMI 柴田知美

人との繋がリ

日本は経済面では確かに豊かです。豊かすぎると言っても過言ではないでしょう。私はそんな日本に足りない物をマレーシア、ティウロン村で見つけました。それは、人々の繋がリ、人間の暖かみです。寒い朝はボタン一つで温かくなり、暗い夜もボタン一つで明るい…。私達のこの指先では知り得ない事をティウロン村の方達は知っていました。日本は物で溢れかえり、欲しいものは余程の事がない限り手に入られます。そして、簡単に手に入れば入る程、手放す事は容易い。ティウロン村の人達は絶対に手放す事の出来ないものを持っているようでした。それを村で一体となって共有している。

子供達と一緒に遊んで、笑っていた自分がいたけれど、今思い返せば子供達の笑顔は私の笑顔と少し違っていったような気がします。あれほどの自然に囲まれて、家に帰れば優しい家族が迎えてくれて、きっと小さな体でいてもとても大きな広い心があるからだと思います。人間とはこういった生き物なのか？なんとなくぼんやりと形にはならないけど見る事が

出来ました。

この景色にはきっと真の“人”に触れたから出会えたんだと思いました。背伸びをすれば視線がずれてしまう。ありのままの自分で友人や周りの人に体験した事を話しました。ただ、やはり言葉にするのは難しくて全てを上手く伝えきれません。思ったのは、この気持ちにもっとたくさんの人がそれぞれ自分だけの考えをプラスして、少しだけでも実行すれば、きっと周りにあるのは大切なものばかりだという事が分かるということです。

これから大人になって、もっと色々な社会に携わっていきます。そんな中でこの16才で体験した事を少しでも生かせれば、と感じます。過ぎた事は取り返せないし、変える事も出来ないけれど、次に進む糧になるというのは確かです。人は1人では小さな存在かもしれませんが。痛みや弱さなどの1人では背負いきれないものだってあります。人は繋がってこそ人だと心から思いました。

SENZAKI HONAMI 平崎 侑那己

授業より大切なこと



私がこの植林活動に参加したのは、友達の柴田さんに誘われたからでした。この活動のことは、学校の後ろの黒板に張ってあって、それで知りました。

日本に居るときは、期待半分不安半分でした。さらにいうと、不安だったのは私の祖母でした。そして日本出発の日。家族が見送ってくれたのは姫路駅まででした。そこからは柴田さんと一緒にです。

バスに乗って関空。そこからマレーシアへと飛行機が離陸。ティウロン村に着いたとき、本当に村の方達が全員で出迎えてくれていました。一人一人と握手をして挨拶するのは、正直言うと照れくさかったです。

私のステイ先の家は、村長さんのお宅でした。何よりも驚いたのが、村長さんが日本語を話せる事です。ステイ中も私たちがお母さんの言っていることがよくわからないときに助けてくれました。そして、この活動のメインの植林の日。植林のときはお母さんがお弁当を作ってくれていました。私たちは3人で泊まっていたのですが、明らかに3人では食べきれない量でした。最初は、日本人感覚で全部食べきれないといけなかったのかと思っていたら、マレーシアでは食べきれないのがマナーと聞

いて安心しました。ステイ中の一週間は、日本に居るときよりもマナーに気をつけていた気がします。一応宗教的なことも気をつけたほうがいいのかな?と思っていたけれど、特に厳しい感じではなかったので安心しました。そして、別れの日がやってきました。泣いたら余計に別れ辛くなるかな?と思って、泣くのは必死に我慢していたけれど周りの人が泣くからつられてもらい泣きしてしまいました。

日本に帰ってきた後、私と柴田さんは関空から姫路駅までバスで帰りました。途中で人にぶつかったときに「Excuse me」と言いかけた時にぶつかった相手から「あつ、すみません」と聞いたときに、ああ日本に帰ってきたというのを実感しました。

日本に帰ってきたときに、日本人の心の貧しさを始めて実感しました。確かにティウロン村は物資的には貧しかったけれど、心がとても温かい人たちでした。私はこの植林活動で、学校でする授業よりも大事な事を学びました。そして、高校生活で、大事な思い出も作れました。また、こういう機会があればぜひとも参加したいです。



TAZUMI AYA 辰巳 礼

マレーシア植林ワークキャンプ

とても軽い気持ちで参加を決めたマレーシア植林ワークキャンプでしたが、マレーシアで過ごした日々や出会った人たちの事を思うと、参加してよかったなと心から思いました。

村に着くまでは、どんな村なんかな?とか、ステイ先の家族の事を思うと、とても不安でしたが、村に着くと一変。テレビや写真で見えるような高床の家に、熱帯っぽい雰囲気で大興奮。村人も総出で出迎えてくれて、小さな女の子に手の甲にキスされたときは、不安なんか吹っ飛んで自然に笑顔になってました。ステイ先の家族はとっても優しく、いろいろと気も使ってもらって、すごくいい思いをさせてもらってちょっと申し訳なくなるくらいでした。村人もとってもフレンドリー。子ども達なんか以前から友達だったかのように話しかけてくれて、すごく温か

かったです。

肝心の植林ワークはとってもとっても楽しかったです。大好きな土や緑に触れるのが嬉しくてハシャいじやったけど、人一倍頑張ったと胸を張って言えます。1本1本植えるたびに、「大きくなるんやで」って声をかけながら一生懸命植えました。こんなに楽しいと思ってなかったから、お別れのときはすごく悲しくて、ずっと村に居たいとも、帰りたくないとも思いました。家族と別れるときは本間に号泣で、いま思い出すとちょっと笑えます。

あの村には便利なものは何一つなかったけど、停電はしょっちゅうでロウソクで食卓を囲む事がほとんどだったし、テレビはあってもビデオしか映らないし、トイレは流れないし、

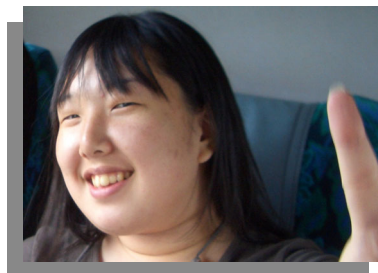
お風呂は雨水を貯めただけの水浴びだし、パソコンもなければ、洗濯機もエアコンも扇風機さえもないけど、それでもそんな便利なモノがなくても、あの村は村人の笑顔で溢れてて輝いてました。村にいる間中は本当によく笑って、たくさん幸せを感じました。便利なものがある中で生活しているのが幸せなんじゃなくて、幸せの形はもっと違うものなんだと改めて実感しました。そして、日本にいと、時間に追われる毎日で、毎日がなんとなく、あつという間に過ぎていくけど、あの村では毎日が本当に濃くて、1日1日が充実していました。

私にとって、このワークキャンプはただの植林ワークキャンプではなくて、これからの自分に大きく役立つものになったと思います。もっときちんと環境問題や国際問題について知りたいと思ったし、中途半端にエコするんじゃなくて、自分がそれを行ったところでどうなるか、それで困る人はいないのかとかちゃんと考えようと思いました。また絶対にあの村を訪れたいし、自分が植えた木や遊んだ子どもたちとまた笑い合ったりしたいです。

TSUJI GAORI

辻織

マレーシアの感想



私はこの植林キャンプを通して国の環境問題について考えさせられました。なんとなく参加したマレーシア植林キャンプでしたが事前の参加者の集まりや募金活動などで環境や木のことを学びマレーシアに行ってみると自分の想像していたマレーシアと全然違いました。一番びっくりしたのはマレーシアの方が環境意識の低いことでした。

ティウロン村を訪れるまでにたくさん木を見てきました。木は目の前にたくさんあっても今、木はこうしてる間にも失われていると思いました。市場では野菜、魚、果物等いろいろなものを売っていて見ていて楽しかったです。けれども、そのまま道にゴミを捨てられていてゴミ箱があるのが日常になっている私にとってはとてもびっくりしました。

ティウロン村についてびっくりしたのは子供たちがすごい笑顔でむかい入れてくれたことと、とても村の人たちが優しくかったです。ホームステイ先のお父さんやお母さんは英語が通じ

なかったですが、笑顔で聞いたり子供たちも話しかけてくれたりして不安も吹き飛びました。

マレーシアでいる時間は普段時間に追われてる日本に居るときとは違い、全てがゆっくりと感じました。植林をする三日間はあつというまで食べ物もおいしかったのですが、家族皆で食べれないのが残念でした。

植林キャンプ期間中に誕生日だったのですが、誕生日ケーキを用意してくれたりネックレスや指輪などくれたり私にとって忘れられない思い出たくさんマレーシアとなりました。

別れるときには泣いてしまいました。小さな子供まで泣いてくれてすごい感動しました。マレーシアに行く機会を与えてくれたのは両親がいたからだし、いかせてくれた親に感謝しています。ここで出会えたスタッフさんや友だちに会えてほんとにうれしかったです。



HIRANO YUKO

平野優子

マレーシアでの経験

マレーシアから帰ってきた今、体が軽くなった気がしています。私たちは普段、人と接している時、口には出さない色々なことを考えています。先輩・後輩などの立場的なことや、相手との間で今までにあった出来事など。それがマレーシアでは、そういった算段なしで、素の心で人と接する感覚を思い出せました。

マレーシアでは満足に言葉が通じません。たった一週間足らずの共同生活でした。その中で私は、その時々気持ちを伝え

るのに精一杯でした。そしてこの、一生懸命気持ちを伝えようとするのが、人間関係の壁をなくしたのだと思います。

しかしマレーシアでこのような経験をしたらからといって、戻ってきた日常でも同じように振舞えるとは思っていません。ここには今までの積み重ねがありますから、それを無視して素の心で振舞うのは難しいことです。ただ、人間関係で煮詰まってしまったとき、この感覚を覚えていれば解決の糸口になると思います。

私は今回、植林ボランティア、と言う名目でマレーシアに行きました。ボランティアは本来、社会や他人への奉仕活動ですが、逆に私が手を貸してもらうことの方が多かったと思います。例えば、歩いて三十分の畑まで工具や休憩用の水などを持っていくとき。本当なら私のワークなのに、九歳の男の子が運ぶのを手伝ってくれました。また植林のために土を掘るとき、土壌によってはすごく掘りづらい場所もあり、てこずっていると必ず現地の誰かが手伝ってくれました。しかも私たちが畑仕事に不慣れでなかなか作業が進まないのに比べて、現地の人たちはずっとスムーズに草を刈り、木を植えていきます。その様子を見ると、自分の無能さを情けなく思わずにはいられませんでした。そしてこんな私たちを一週間も受け入れてくれた村の人たちに改めて感謝の念が湧き、同時になんと心の広い人たちなのだろう、と心打たれました。

ボランティアで来た、という使命感はありました。けれどせっかくの手伝いの申し出を断ったら悪いかなという気持ちと、正直疲れたからすごくありがたいという本音に負けてしまいました。自分は体力的にも精神的にもこんなに弱いやつだったのかと思いました。

私の弱点は、自分は今これこれがしたい、という「欲」です。日々の暮らしの中で例をあげれば、テレビや携帯、友達からの誘いです。自分は今受験生ですからこれらを我慢することは勉強時間も増え、一石二鳥だと思います。テレビや携帯を我慢することなんて、すごく小さなことだけれど、一本一本植えた木が世界の地球温暖化に影響を及ぼすように、小さな積み重ねが大きな結果を生む、というのも今回のワークキャンプで学んだことの一つです。そして次回ボランティアに参加できた時には、自分の成長ぶりを確かめたいです。

FUJII MINAMI 藤井みなみ

いつか



飛行機の中から、足を踏み出した。もうマレーシアのコタ・キナバルだった。日本から来たばかりの私から見れば、コタ・キナバルはみすばらしく思えた。ここでは三ツ星だというホテルの白いタオルを開けば、蟻の死骸があった。マレーシアと日本とでは常識が違う、と思った瞬間であった。

長い長い、バスの窓から移りゆく風景。続く続く、様々な緑色。ぼつりぼつりとある民家。空も表情を変える。それをただぼんやりと見ていた。言えるのは、私は見たことがなかったということだけである。そこには、何にも邪魔されない空が広がっていた。

森に囲まれた家とか、木で出来た家とか、放し飼いの動物とか、手を伸ばせば果実が食べられるとか、ちょっと憧れていた。そんなことばかりを想像していた私は、甘っちょろい幻想の中にいたと言っていいだろう。森を見てまた森を見て、眠って、鶏を見て、森を見て、と繰り返すうちに村に着いた。

ティウロン村の人々は、ほのぼのとしていた。時間に追われて走り回っている日本とは随分と違う。時間の流れはゆっくりだった。ランブータンの実が緑から黄色へやがて、赤みをおびていった。毎日が和やかだと想像出来た。ティウロン村の人々は、当たり前前に綺麗だとは言えない雨水で行水をして、蓄積されていくトイレで用を足す。それでありながら、韓流ドラマのビデオを見て、携帯でメールを送る。これは、私にとってとても不自然な光景だった。これこそが、発展途上国なのだろうか。ティウロン村の子供達は、素直だった。楽しそうに笑って、遊ぶ。クオツシエンレッツロツ、と言ってははしゃいでいた。まさに子供、そのものだった。

明るい日々だったが、私は日本人である。文化の違いが分

かっていても、食事を残してしまうのは申し訳なかった。トイレからの臭いは、鼻を塞いでも皮膚から臭いが入ってくるような感じだった。子供達はビニールをボイ捨てしてはいけない、と知らないようで悲しかった。また、私達が来たことで、家族には気を遣わせていたと思う。ママは殆んど毎日私達が食事を済ました後で、食事をしていた。たくさんの果実を食べさせてくれた。私達が居るので、部屋も移動していたかもしれない。ほかほかした楽しい時間だったが、影もあった。

植林しながらも、歯がゆさがあった。私は女で、力がない。太い木の根があれば、自力で頑張るよりも、誰か男に頼んだ方が断然早いのだ。トンバックで穴を掘るにしてもそうだった。当たり前のことだが、悔しかった。でもこれが助け合いということだと気付いたのは、ワーク最終日だった。ワークにはもう役立てられない。だから人生の中で役立てられれば良い。自分は自分出来る最大限のことをすればいいのだ、と思った。植林を終えて、子供達と遊ぶ日々。何故だか「むかつく」ということが一度もなかった。こういうのが、幸せなのだと思う。

時間はゆっくり流れていたけれど、ティウロン村から去る日はあっという間に来た。泣かずにバスに乗り込むだろう、と予想していた。たった数日、笑いながらちょっと遠慮して過ごしただけだと思っていた。「いつか」別れの時は来ると分かっていた。さよならの握手をする手は温かかった。ママは目を赤く潤ませていた。蜂に刺されて、痛々しく腫れた右目で。それを見て、私も泣いてしまった。キコモストローグ!と言いながら、泣いていた。トミーは泣きじやくっていた。次々と手を繋ぎ、離れた。出発するバスを、子供達が走って追い駆けて来ていた。「いつか」とはこんなに切ないものだった。

バスが走る。私はまた森を見ていた。空も見ていた。さらば、私の好きなマレーシア!といった気持ちだった。

嵐のように時間が過ぎて、飛行機の窓から朝が明けるのを見た。綺麗だったけれど、飛行機の行く先は日本だった。家に

帰れる、白米が食べられる、お風呂に入れる…。でも続く言葉は'しかし'だった。

日本に着いて見たのは、ビルの間から見えるすさんだ空だった。



FUJIWARA SAACHI
藤原佐智

マレーシアワークキャンプ を終えて

事前学習、キャンプを通して、いろんなことを考えだし、教えてもらった。

初め、日本にいたときほんまに行きたくなかった。日本の良さ。良い面、悪い面いっぱいあると思う。マレーシアに行っていっぱいわかった。うちがホームステイした家(アンティーク)はテレビもトイレに電気もなかった。でも夜、みんなで歌って踊って。日本にいたときよりもめっちゃたのしかった。カラオケも楽しい、プリクラも、買い物もめっちゃ楽しい。でも、比べられないものがなんかあって。マレーシアめっちゃ楽しかった。初めてあったのにあんなにみんな笑顔で、親切で。ほんまに大好きになった。「さち」ってすぐにみんな名前覚えてくれた。名前を何回も聞かないと覚えられない自分が嫌やった。6日間めっちゃ笑った。たのしんだ。声かれるくらい笑えたとか…。!!どんだけ楽しかったんやろ。いっぱいいろんなもんをもらった。気づけた。相手がどうあっても信じようと思った。誰にでも親切に、相手の気持ちがわかる人になりたい。いっぱい英語、言語を勉強して、いろんな国の人としゃべりたいと思った。

日本。自分が今まで日本の中の箕面市の新稲のちよっとした小さな世界で生きてきたことに気づいた。日本に帰っているいろんな価値観が変わった。ものを大切にしようと思えだし、人をもっと大切に、やさしくしようと思えた。勉強もいっぱいがんばりたい。「やるときはやる」これを大切にしていきたい。日本のみんなもめっちゃ大好き。こんなに仲良くなれるとは思わなかった。大好きな友達がいっぱいできた。いっぱいめいわくかけたし、いらんこともしっぱいした。それをやさしくゆるしてくれる。みんなどんだけ心広いねえん。

これからみんな離れてとおいところにも別れるけど、ずっとそのままで最高のみんなであってほしい。このメンバーでいけてよかった。今、自分に何ができるか。自分にといかけて、行動していきたい。人の役にたてる人になりたい。自分の家族、友達大切にしようと思った。価値観が変わった。1分1秒大切に。マレーシアの思い出絶対に忘れない。また、みんなに会いに行きたい。

またマレーメンバーでもどっか行きたいなあ。
トゥリマカシ。

MATSUO MIYU
松尾美由

忘れたくない思い出

マレーシアで過ごした7日間は、今までしたどんな経験よりも貴重で、忘れたくない思い出になりました。マレーシアでは今まで味わったことない不便さを感じたり、見たことのない光景を見たり、毎日が刺激に溢れていてあっという間に過ぎてしまいました。

ホームステイ先の家族や村の人たちは私たちの身の回りのあらゆるものに気を使ってくれました。何から何まで気を使わ

せてしまって感謝の気持ちと申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。料理本のレシピを見ながらご馳走を作ってくれたママたち。毎日私たちがいない間にトイレの掃除、マンティーの水をいっぱいしてくれたパパ。こんなに親切にもらったのに私ができることといえばたった3日間木を植えることと子供たちと遊ぶことくらいでした。つくづく自分にできることが限られているなと実感しました。何をやるにも誰かに手伝っ



てもらわないとできないし自分の小ささに直面しました。なのに子供たちは私の荷物持とうとしてくれたり植林を手伝ってくれようとしてました。そんなに役に立つことなんてできない私にどうしてみんながあんなに優しくしてくれたのかわかりませんでした。

村の子どもたちは何かあるわけでもないのにいつも笑顔でした。あんなに楽しそうに笑えるのは、彼らにとっての幸せが、きっと能島さんが言っていた「他者との比較によって見いだす幸せ」ではないからだと思いました。言われてみれば、今まで私は自分が幸せだと思う時、誰かと比べて、自分の方が勝っていて初めて幸せだと感じていました。人と比べるから日常の些細なことに対して感謝の気持ちを忘れたり、どんなことも「当たり前」になってしまうのだと思いました。比べなければもっと身の回りの幸せを純粋に感じることができると思います。自分にとっての幸せなのだから誰かと比べる必要なんて本当はないのかもしれない。

村を出る時、涙が自然に溢れてきました。それはただみんな

と別れるのが寂しいとかそんな単純な気持ちじゃなかったと思います。村で過ごした5日間毎日人の温かさに触れました。みんなに優しくされて、自分も自然に優しくなれた気がします。みんなが笑いかけてくれるから、自分も作り笑顔じゃなくて心から笑えた気がします。また植林を通して、最近忘れかけていた人の温もりや人に感謝する気持ちを思い出した5日間でもあったと思います。あんなに涙が出たのは、毎日を支え、自分を成長させてくれた村のみなさんに感謝の気持ちでいっぱいになったからだだと思います。もちろんマレーシアに行きたいと思っても、三好さんや能島さんを始めとするスタッフのみなさんの協力がなくてはできないことです。大学生スタッフのみなさんは年にしたら私たちと二個くらいしか変わらないのにしっかり私たちをまとめてくれて、すごく大人に見えました。いつか私も大人に近づくそんな一線を超えられたらと思います。スタッフのみなさん、本当にありがとうございました。そしてティウロン村ありがとう!ティウロン村で経験したことや思い出一生忘れたくない!参加できて本当によかったです!



MATSUMOTO ASUKA

松本明香

マレーシア植林キャンプ

こうしてマレーシアから帰国して2ヶ月が過ぎようとしている中、私は自分が7泊8日間マレーシアで生活したことが現実のものではないような気がする。それはきっと日本での現実の世界と、マレーシアでの日々があまりにもかけ離れているからだろう。今思えば、マレーシア植林ワークキャンプは確かに7泊8日間の経験ではあるが、しかし応募して参加決定の電話をいただいた時からすでに私のマレーシア植林ワークキャンプは始まっていたのだと思う。7月16日、第1回マレーシア勉強会に出席した私はとても嬉しかった。気さくに話しかけてくれて、お昼には何気ない会話が盛り上がる、そんな仲間に緊張していた私は安心した。何よりも嬉しかったことは、それぞれ自分なりの明確な目標をもってこのマレーシア植林ワークキャンプに参加した仲間と共に活動できるということだった。募金活動を含めた計6回の勉強会に、私は参加できる日は全て参加した。毎回得るものはかなり多く、また大きいもので、その度にマレーシアが抱えている問題について真剣に考え頭をひねり、しかし答えの出ない難問に何度もいらだちを覚えた。マレーシア出発の日が近づいてくるにつれて、未知の世界だからこそ好奇心もあった。

まず帰国して思うことは、自給自足の生活である。私は、7泊8日間生活させていただいたティウロン村に、村人みんなで力を合わせて村を守っているという印象を受けた。これは日本の現代社会の中で薄れてきている感覚ではないだろうか。朝、鶏の鳴き声で目を覚まし、大家族の小さな子どもたちが起こしにやってくる。朝ご飯はおそらく村で飼われている鶏の肉を食べ、その地で栽培されているお茶を飲む。植林などのワーク

のために出かけ、お昼には村の子どもたちが村で採れた果物などを使った昼食を持ってきてくれて、時には辺りにある木からランブータンなどの果実を採ってその場で食べる。村に帰ると、村の子どもたちと歌を歌ったり、ボールを蹴ったりして遊ぶ。太陽が沈むと、それぞれの家に帰って夕食を食べて、雨水を貯めたマンティーに入り、ろうそくの灯りで寝る。そんな言わば必要最低限の生活を日本人は忘れているように思う。しかし、私にとっては必要最低限の生活が、マレーシアのティウロン村の人々にとっては当たり前の毎日の生活なのだ。もしかしたら、私たちが滞在している間、少し普段より裕福な生活をしていたのかもしれない。私はティウロン村で1日を過ごして初めて1日の長さを知った。日本ではテレビを見ていればあっという間に1・2時間が過ぎてしまう。勉強もしなければならぬが、しかしメールだってしたい。気がつくともう深夜1時、2時ということが毎日である。毎日が時間に追われているような生活で、そんな毎日に私は疲れを感じていた。確かにティウロン村は、日本に比べて物理的には貧しいかもしれない。しかしティウロン村で過ごした毎日は、日本での生活に比べてどれほどゆっくりと時間が流れ、充実していて意義のある生活だったことか。朝早く起床して、植林活動をする。子どもたちと思い切り遊ぶ。明らかに身体的に日本での生活より疲れるものではあるが、しかしそんなことは全く感じなかった。夜にはファミリーがギターを弾いて日本の曲を歌ってくれ、私たちはそれに合わせて歌う。私はそんな生活のなかで、本当の人の温かさ、優しさを知った気がする。言葉が通じないために、身振り手振りでなんとか言いたいことを伝えようとする私たちに、ティウ

ロン村の人々はそれがいくら時間がかかってもどうにか私たちを理解しようとしてくれる。私の足が泥で汚れた時には、走って水を汲んできて、足に水をかけて洗ってくれた。いつも輝くばかりの笑顔で私たちに接してくれた。どこを取ってもティウロン村の人々の温かさが溢れ出ていて、すべてを書き表すことはできない。

最近では、ふとした瞬間に子どもたちの笑顔を思い出す。きっとあの笑顔は、マレーシアという国が抱えている問題、世界の国々が抱えている深刻な環境問題は何も知らないだろう。私はあの子どもたちの無邪気な輝くばかりの笑顔を守りたい。しかし、今の私には、いくら考えても振り出しに戻るばかりで、解決策は全く見つからない。世界が抱えている問題は本

当に難しい問題なのだと実感するばかりである。しかし、これから大学へ進み、視野を広げて、沢山のことを学んでいく中で解決への糸口を少しでも見つけたいと思う。その上で、きっとこの7泊8日間のマレーシアでの体験は何らかの形で生きてくだろうと思う。いま、ティウロン村の人々、私をあらゆる面で支えてくれて、一緒に乗り越えてきたメンバー、このすばらしいひと夏の経験を私に与えてくれて、また私たちがこのワークキャンプを精一杯楽しむことが出来るように夜遅くまで計画を練り、工夫を凝らしてサポートしてくださったブレンヒューマニティーのスタッフの方々、そして私の想いを理解して応援してくれた家族や学校の友達に、ありがとうという感謝の気持ちでいっぱいである。

MIZUNO YUKI
水野 悠紀

ワークキャンプに参加して



「木を植えたい。」というのは、小学校の頃からずっと思ってきたことでした。それは、中学校に入ってからもなくならず、ますますそう思うようになりました。

高校になって、東南アジアに行ってみたいと考えるようになりました。行って、実際に木を植えたりするようなことはできないだろうけど、現地の人たちがどんな生活をしているのか、日本とどんなところが違うのか、見てきたいと思いました。

そんなときに、このブレンヒューマニティーのマレーシア植林ワークキャンプのことを知りました。絶対行きたいと思いました。

他の参加者の人たちと住んでいるところが離れているけど、両親を説得して、キャンプに参加できることになりました。

キャンプでは、いろいろなことを知りました。特に植林をするときに受けた説明で、一種の木だけをたくさん植えるのは、逆に環境によくない、というのがありました。アカシアの木の茎が葉みたいになった部分は、落ちて分解されずに、どんどん積もって、乾燥します。それにたまたま火がついたりすると短

い時間で火が燃え移ってしまうそうです。それを聞いて、私はただ漠然と「木を植えたい」とだけしか思っていませんでしたが、今は産業植林じゃない植林がしたいと思うようになりました。植林事業も二酸化炭素を減らしたり、材木を取ったりするのは大切だとは思いますが、それは、人間が自分たちだけのために植えているような気がしました。だから、植えるんだったらたくさんの種類の木を植えたいと、自分のやりたいことが少しわかりました。

ティウロン村では、他にもたくさんのことがありました。村の人たちは、みんな優しくて明るくて、一緒に過ごしていてとても楽しかったです。フェアウェルパーティーで、日本の歌を日本語で歌ってくれたことが一番嬉しかったです。

マレーシアに行くまでも、気がついたらすぐだったけど、この七日間もあつという間でした。あつという間ではあつたけれど帰りたくなるくらいすごく充実していました。このワークキャンプに参加できて本当によかったです。



MUKAI YUSUKE
向 裕 介

ありがとう

この企画を母から聞かされたときは、参加したいという気持ちはあったがかなり迷った。理由は、高校3年生という大事な時期にこんなことしていい

のかという気持ちがあったからだ。もちろん、友達に相談しても「お前大学大丈夫なんかい。」という答えが返ってくるだけだった。でも、前から「世界ウルルン滞在記」というテレビを見

て「あんな日本では味わえない世界のいろんな村に行ってホームステイやその国の文化や言葉に触れることによって自分をもっと大きくしたい。そして、別れの際に涙するような充実した生活を送ってみたい。」そういう思いがあったし、修学旅行のホームステイの失敗が悔いに残っていたので行くことを決意した。しかし、参加を申し込んだ後日スタッフから「今回の参加者が男1人」ということを聞かされたときは、「ありえん。参加をあきらめよう」と思った。

自分は男子校に通う身だから22人の女の子の中に男1人というのはさすがに緊張するし、寂しいだろうし、男と女の価値観の違いなんかでもめたりするだろうなどいろんなマイナスな考えが自分の頭の中をグルグル駆け巡った。でも、逃げてばかりなのもよくないいい経験になると思って参加をお願いした。電話が終わったあとは母から「参加者が22人に満たなくて、この企画が中止になったほうがよかった。」と聞かれたがそういう気持ちは少しもなかった。

数日後から始まった勉強会や募金活動を通してだんだんと参加者と仲良くなれ不安が少しずつだが薄れていった。勉強会ではマレーシアのことや環境問題などを勉強することにより世界にもっと興味をもつことが出来た。募金活動では今まで1度も町に出てしたこともなかったけど、積極的に声を出して募金を呼びかけている自分に驚いた。

そして、マレーシアワークキャンプが始まった。ティウロン村に着いて、村の人たち1人1人と握手をした際驚くほどみんなが暖かくはじけんばかりの笑顔で迎えてくれて不安が一気に吹き飛んだ。村で生活しながら驚くことや尊敬するようなことが多々あった。植林が始まり、作業をしているとき村の人たちは自分たちの負担を軽くさせようと休憩しているときでさえも一生懸命作業をしてくれていた。日本人には到底まねの出来ないことだと思う。他にも、村の人々は自分たちが声をかけるたび必ず笑顔で対応してくれるなど、本当に心の広く暖かい心をみんながもっているのもすごいことだと思った。別れの際も、村の子供達でさえ涙を流して別れを惜しんでくれた。

私はこのワークキャンプに参加して今の日本人が忘れていることがこの村にはあると思う。日本人は裕福すぎる。そして裕福なことが幸せなんだと思っている。私も日本にいた間はそうだとずっと思っていた。しかしティウロン村に行ったらそれは間違いなんだとわからせてくれた。たとえ、お金がなく電気も水も限られた量しか使えないそんな状況であっても常に笑顔ですごせることが幸せなんだと思った。

日本に帰宅した際、両親が迎えにきてくれ帰りの車中で心のそこから「今回参加させてくれて本当にありがとう」といえたことが本当によかったと思う。

YAMAGAKI MARI
山崎真理

トゥリマカシ



正直、このワークキャンプをやり遂げる自信は無かった。いつも、一歩踏み出せなくてチャンスを逃して、途中で諦めていた自分を信じるができなかった。思い切って応募したのは良かったけど、応募した後には後悔。知ってる人が一人もいないのに、海外一週間なんて、絶対無理。すぐ日本に帰りたくなるに決まっている。そんな不安ばかり大きくなって、マレーシアが楽しみだなんて心から思えなかった。それでも、お金を出してくれた親や、募金に協力してくれた人、なにより自分に幻滅したくなかったから「やり遂げたい」って、思った。

でも、今はそんなに悩んでた自分がばからしいと思える。すっごく楽しくて、すっごく充実した一週間で過ごせた。何もなくても幸せだった。もしかしたら何もないほうが幸せなのかもしれない。みんな目が合うと、純粋でかわいい笑顔を見せてくれる。笑いかけられると笑い返している自分がある。言葉は通じなくても、ただ一緒に笑っているだけで楽しかった。日本との違いで戸惑うこともあったけど、ティウロン村の人達というと、自然と笑顔になった。ひとなつっこくて、キラキラした目をしてる子供たち。その小さな手からは本当にたくさんのエネルギーを貰った。みんなともっと一緒にいたくて、もっと一緒に遊びたくて、もっと一緒に笑っていたかった。出会いがあれば別れがあるんだという事を身に染みて感じ、初めて別れが辛くて

泣いた。

今まで環境問題について勉強してきたけど、どれだけ考えても解決策にたどり着くことができなかった。プラスになると思ってやってたことも、視野を広くすればマイナスになっている部分がある。自分にできることは何か？それは植林しかないと思った。暑くて、日差しが痛かったけど、一本一本、気持ちをこめて植えた。終わったときは、達成感でいっぱいだった。無理して大きな事ことをするよりも、自分ができることを精一杯やり遂げることが大事なんだと気づいた。それと同時に、仲間がいることの重要さにも気づけた。このマレーメンバーだったからこそ、しんどいワークもやり遂げられたんだと思う。

このワークキャンプに参加したことで、環境問題についての意識が上がり、自分の未熟さを知った。そして、たくさんの人の温かさ、優しさに触れたことで、今までに感じたことのないような「感動」を味わえた。それは、今の自分にとっても、これからの自分にとっても、かけがえのないものになると思う。勇気を出して一歩前に踏み出せば、大切なものを見つけることができる。この経験を通して、自分を見つめ直し、これからの毎日を大切にしていこうと思う。そしていつか「ただいま。」って、もう一度ティウロン村に帰りたい。このワークキャンプに関わったすべての人に「Terima Kasih」。



YOSHIOKA ERINA 吉岡絵里奈

私のマレーシアキャンプ

関西学院大学とつながりのある私の学校には、中学生の頃からブレンヒューマンティーマークの方々が説明会で訪れ、様々な活動の紹介をしていた。中でも海外キャンプはひととき私の関心をひいた。私自身、クリエイティブクラブという神戸市の中高生が集まって活動をする団体に入っていたので、自然に高校生になったら海外キャンプに参加しようと決めていた。

高一は学校からホームステイがあったりで高次の夏休み前にチラシをもらったときは、「この夏に勉強頑張らんかったらおわりやから多分反対されるやろなあ〜。」と思っていたのに、意外にあっさり許しがでて、ついにずっと憧れていたマレーシアキャンプに旅立つことになった。

私は今までの参加者のコメントの中で特に、「人生観が変わる」「これからの人生に大きな影響を与えるだろう」というものが心に残り、せっかく大学生ではなく、今この高校生の時に行くんだから、今しか得られない、これからの生き方に表れるようなものをつかんでこようと思っていた。

しかし、現実には自分の立てた計画も思うように進まず、本当にマレーシアに行って大丈夫なのか？と何度も申し込んだことを後悔した。でも行ってしまえばこっちのもんだと思い直して、ギリギリまで計画を頑張った。

マレーシアでいきなりの村人全員集会和握手という素晴らしい歓迎を受け、単純な私はすでに感動していた。家族は三人姉妹の家で子どもが苦手な私は本来喜ぶべきなのだが、過去の写真で、きっと十人家族とかだろうと思って大量に買い込んだお菓子が残念な結果になってしまった。前もってステイ先の家族構成を知っておきたかった。

私が今回のマレーシアでもっとも大きな衝撃はホストファミリーがものすごく大事に私を扱ってくれたことだ。去年のカナダのホームステイの方がもちろん豊かなのだが、マレーシアのファミリーは、もう丁寧をとおりこしてこちらが気をつかうくらい至れり尽くせりだった。

また、日本語を教えてほしいと言われたとき、簡単な日本語とかかなと思って遊び半分で訳そうとしたら、ものすごく具体的な日常会話をたくさん聞かれ、これからやってくる日本人の為に熱心に習得しようとする姿勢に頭が下がる思いだった。

まだまだたくさんカルチャーショックはあるのだが、今回ミネラルウォーターが支給された環境の中で最もありがたみを感じたのは電気である。一日目、停電で真っ暗な中ご飯を食べ、キッチンでお父さんが一人ろうそくを灯しながら出刃包丁で肉をたたききっている光景を目のあたりにした時は、ホラー映画かと思った。勉強したい盛りの十八才の長女も、電気がないのでは随分自分の時間が限られるだろう。

現地の人間だけでなく、マレーシアキャンプ参加者からもたくさん刺激を受けた。日本にいる間も常にエコな生活を実行している人、しっかり植林に対して知識がある人、常にアンテナを張って周りに気を配っている人など、何となく好奇心で来た私とは比べものにならないほど、このマレーシアにける重いが偉大な人ばかり。

でもこの一週間、私なりに植林もはりきり(あまりの下手さに現地の子どものほとんど手伝ったけど)ホストファミリーと思い切りコミュニケーションを取り、観光では手に入らないかけがえのない経験をした。当初の目的である、人生観が変わるとまでは行かないが、とにかく今の私は「どんなことでも耐えられる」という強い意志でいっぱいである。将来、あの日マレーシアに行ってよかったと思えるように、この意志を保ち続け、この先起こるどんなつまらない事にも惑わされず、自分を持っていこうと思う。旦那さんを連れてマレーシアにもう一度やってきたかつての参加者のように、私も理想の自分をお土産にマレーシアに戻ってこれたらいいと思う。

参加スタッフ感想文

KITAGAWA TATSUYA

北川達也

みんなへ



僕にとっては2007年の4月から始まったこのワークキャンプは、まさしく僕のこの1年間を表しているといっても過言ではないだろう。それだけの時間をこのワークキャンプのために裂いてきたし、自分の中の何よりも優先してこのワークキャンプに打ち込んだと言える。しかし、僕が今ここで言いたいのは、「これだけ頑張ったんだ」といった事ではなく、それだけの価値を僕がこのワークキャンプに見出していたということである。表舞台には決して出てこない、苦しい出来事も僕達スタッフは経験している。苦しければ苦しい出来事ほど、過去の出来事となってしまうと、よりいっそうよい思い出として美化されると言われるが、そうではなく、当時からこれら全ての出来事が僕たちにとっての成長に繋がると信じていたし、その気持ちは今も変わることはない。そういった意味でこの1年間は、大学生活の中でも最も充実していたと胸を張って言えるし、このような機会を得ることが出来たことにまず感謝したい。

しかし何よりも大きな収穫は、君達やスタッフ、他の多くの人々との出会いだと思っている。ボランティアは与えるものではなく、与えられるものだと言われ、その言葉を痛感させられる1年間だった。僕達は立場上、君達にワークキャンプを提供する側にいる。「高校生に多様な価値観を提供する」がこのワークキャンプの目的の一つではあったが、運営側の僕達も、君達の考え方や価値観に触れ、また共に歩むことでどれだけ多くのものをもらったことだろう。それらを一つ一つあ

げていくとキリがないが、確かな事は、それらは今後僕にとって人生の糧となり、また思い出は支えとなるということだ。

何事にも始まりと終わりがある。ワークキャンプはこの報告書をもって全ての活動を終えるだろう。しかし、全てにおいて幕が降ろされるわけではない。終わらない想いもまたあるということ、僕は頑なに信じている。

最後に、報告会でも伝えたが、これから人生の岐路に立つ君達へのメッセージでこの感想文を締めくくりたいと思う。

「人生には無限の可能性が開かれている」という言葉を聞いたことがあるだろう。「君は何にだってなれるんだよ。何でも好きな事が出来るよ」…と。耳にたこが出来るほど聞いたきた言葉だ。でも僕はそんなの信じやしない。いつでも望み通りの選択肢が現れてくれて、最後には願ったままの結末が待っている…なんてのはありっこない。自分の思う選択肢がない時があるかもしれない。時には選択肢が一つしかないかもしれない。だけど忘れないで欲しい。大切なことは、その少ない選択肢の中から選択するのはやっぱり自分自身の意思なんだということ。そして将来、自分の過去を振り返ってみたときに、自分がしてきた選択に誇りを持てるような、流されたんじゃないと胸を張って言えるような、そんな人になって欲しいと心から願う。君達にとってこのワークキャンプに参加したことは、そんな選択の一つだと言えるならば、これほど嬉しい事はない。



NISHITANI MANA

西谷 真奈

Terima kasih

参加者として高校生の時に参加したマレーシア植林ワークキャンプは、私にも私の人生にも大きな影響を与えたと言っても過言ではないと思っている。実際参加していたときは高校生の中でも脳天気で物事を深く考える方ではなかったが、す

べてが終了した後にたくさんのことに気づかされた。1年半後にスタッフとしてマレーシアに行くなんて夢にも思わなかっただろう…。そしてきっと誰も思わなかったことだろう…。

家にはきれいな水洗のトイレ、ふかふかのベッド、ひねれば

簡単に水やお湯がでてくる蛇口、温かいお風呂や夜中までつけていられる照明がある。これらは日本ではごくふつうであるけれどもマレーシアは違った。暗くなると寢床に着くかロウソクの灯りで生活する。水の勢いで流すトイレ、鍵を開けっ放しの玄関、家の中でも虫の大量、雨水でのマンディーやとてもきれいとは言えないお風呂場。おせじにも便利とは言えない。自分自身マレーシアでの生活に慣れ親しんでいたつもりだけれども、日本に帰ると日本の生活にすぐにとけ込んでしまったのが悲しかった。やはり自分は日本人だと実感する。

ティウロン村の人々の生活は、ほとんどのみんなが「幸せ」だと感じただろう。それは言うまでもなく子供だけでなく大人の笑顔にも出ていた。日本にいたときのようなかわいい服を買ったときの幸せや、おいしいものを食べたときの幸せとを感じるのとはまた違う。今まで描いていた幸せとは違い、ゆったりと時間が過ぎ、心の豊かさがあつた。幸せにはたくさんの形が

あると思っている。自分の生活がどれほど裕福で幸せなのかを見直せたらと思っている。そしてわがママを言いつつも忙しい生活をいつも支えてくれていた両親に感謝したい。

ワークキャンプの準備に取り掛かってから約3ヶ月間はなかなか容易なものではなかったけれども、後悔はしていない。たくさんの自分の未熟さを知り、たくさんの刺激を受け、さらに自分の成長に繋がったと思う。参加者として参加したときは自分で精一杯だったが、今回はスタッフとして高校生を引っ張っていく立場というのが前回との違いで戸惑いと不安でいっぱいだった。何もしてあげられなかったことを悔しく思う。人生の中で考えればほんの1週間だけれども、同じ太陽の下で汗をかきながら同じ目的を持った仲間と一緒に植林したことをどうか忘れないでほしい。そのとき思い、感じたことも……。まだまだ終わりじゃない。一緒に乗り越え、成長できたのだから自信を持って前に進んでいってほしい。

MUROYA NAHOKO 室谷那穂子

心の豊かさ知れた出会い



私が参加者の皆にまず伝えたいことは、今回の「高校生マレーシア植林ワークキャンプ2007夏」に参加してくれて本当にありがとう、という感謝の気持ちです。皆の参加によって私の生活は、それまでとは一変して、素晴らしく充実した毎日になりました。

皆はこの企画に参加して、物の見方や価値観が変わり、視野も広がったと思います。それは日本での自分の生活になんらかの影響がありましたか？

私は皆にマレーシアで感じたことや学んだことをこの先もずっと忘れないで日本での生活に生かしてほしいと思います。高校生という一番柔軟な時期に異国に行き、自分たちで力を合わせひとつのことを成し遂げるということは本当に難しいですが、素晴らしい経験だと思います。皆が一生懸命作業にとりくむ姿に心を打たれ、自分自身のスタッフとしての行動に責任を持つようになりました。

自分の高校時代の夏休みと比べると本当に羨ましいほど皆素敵な笑顔でした。自分でいうのもなんですが、私も村では本当にいい笑顔でいられたと思います。それが本当に不思議で、なぜなのか何度も振り返りました。日本ではなかなか感じられない人の優しさや思いやりが当たり前かのようにあるあの村で皆も私と同じように考えたと思います。そして出た答えが「お金持ちや便利な生活が幸福とは限らない」という考えだと思っています。

私はずっと将来は大手企業に就職し、お金を儲けたい、お金が欲しいと思っていました。でも、そんなくだらない私の夢、つまり私が十九年間生きてきた上での価値のあるものが、一週間という短い間で変わりました。

本当にお金なんてなくても、素敵な服を着なくても、皆毎日笑顔で助け合いながら過ごす日々が一番の「幸福」であると感じました。皆も同じだと思います。

でも私達はあくまで日本人であり、日本で住んでいるのであって、マレーシアでのようなのんびりとした生活はできないと思います。ある程度お金は稼がなければなりませんし、将来子供ができれば、養っていかなければなりません。どうしてもお金はいります。しかしマレーシアで感じた「幸福」はいつまでも忘れずにいてほしいです。

お金や便利さではない幸せがある。人に思われることの嬉しさ、人を思うことの豊かさ。日本での繰り返しの毎日の中では見つけにくいことにこの「高校生マレーシア植林ワークキャンプ2007夏」は導いてくれたと思います。私も絶対にこの気持ちは忘れません。

私はこの数ヶ月、自分がボランティアをしているなんて感じたこともありませんし、思ったこともありませんでした。ただ、私は「マレーシア植林ワークキャンプ2007」にスタッフとして関わることができて本当に良かったと心の底から思います。ティウロン村にいたのは一週間足らずでしたが、私の「マレーシア植林ワークキャンプ2007」は数ヶ月に渡って行われたもので、日々勉強の毎日でした。参加者のみんなに出会えて、たくさんのかわいい妹と弟ができて、私は本当に幸せです。参加を決めてくれて、本当に本当にありがとう！みんなは私の財産です。みんなのがんばり笑顔は他の人にとっても良い影響を与えます。自信をもって一生懸命生きて思いっきりの笑顔でいてください。あと、この企画で出会った様々な人々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



YAMAGUCHI NORIKO 山口紀子

“仲間”

私がマレーシア植林ワークキャンプをやると思ったのは、過去にスタッフを経験した友人と話をしたときに、すごくいい顔をして、「マレーシアはいいところだから、行っておいで!!」という言葉を書いたからでした。いままで海外経験のなかった私は、「私も新しい世界を見てみたい」と強く思うようになりました。また、今までは小学生との関わりを主に活動してきましたが、高校生と関わることで、また新しい価値観が得られるのではないかと思い、自分が参加者ではなくスタッフとして行くことを決めました。

事前準備が始まると、なかなかうまくいかないことも多く、時には仲間と衝突することもありました。しかし、苦しかったときに浮かんできたのは、参加者のみんなの顔でした。大きな希望を持ってこのワークキャンプに参加してくれる人がいるのに、自分があきらめる訳にはいけないと思い、最後までやり遂げることが出来ました。高校生のみんなは私たちよりも素直で、どんなことにも興味をもって取り組んでいく姿を見て、何度も自分自身を振り返りました。そして、いつもまっすぐ気持ちをぶつけてくるみんなに、自分も真剣に向き合おうと思いました。それは、大学に入ってから忘れかけていた事だったような気がします。それ以降、スタッフの間でも、思っていることは納

得するまで話をし、向き合うようになりました。高校生のみんなと関わって、家族や友人との関わりにおいても大切にしなければならぬことに気付くことが出来ました。

ここで、突然ですが、私が大切にしている聖書の言葉をおくります。

「自分自身の内に塩を持ちなさい」

この言葉を、私は中学1年生の春、入学式で聞きました。塩というのは海水を火にかけて、水分が蒸発しても残る結晶であり、ここでは自分らしさを表しているそうです。どんなときにも最後に残る自分らしさと、自分と違う考えや価値観を持つ人を受け入れるしなやかさ。この二つを心に持ち合わせた人は、とても魅力的で素敵な人だと思います。

みんなもこれから先、いろんなことを経験していくと思いますが、その度に自分で考えて、どんどん素敵な人になっていく欲しいと思います。ワークキャンプは終わっても、私たちが仲間であることはかわりません。うれしいときや迷ったときなどいつでも連絡してくださいね!!

最後になりましたが、このワークキャンプでみんなと出会えたことに感謝します。本当にありがとうございました。

NISHII GAORI 西井佐織

高校生マレーシア植林 ワークキャンプ2007夏



スタッフとして参加させてもらい、高校生と過ごした事前・事後を含めた数ヶ月間。長い人生から見ればほんの一瞬のことですが、本当にそれぞれがいろんな事を感じ、「変化」をした日々だったと思います。

高校生自身が参加を決め、実際にマレーシアに行き植林をして現地での生活を経験したというのは自分自身の力になり自信にもつながると思います。日本との違いを感じこれでもいいのか、もっとこうすればいいんじゃないかなど疑問を持って帰った人も参加者でいました。ただ日本に帰ってきて日本の生活をしているとだんだんと薄れてきてしまっているかもしれません。しかし感じたことをそのままにしても何の変化にも

成長にもつながりません。マレーシアだけでなく普段の生活で感じることは自分の成長につながるチャンスだと思います。自分が動き出せば必ず変化した違う成長になります。一步を踏み出せば何かが変わると思います。

自分1人で出来ること・誰かと協力して出来ること。その場その場によって求められる力は様々です。今回のワークキャンプが自分の力の1つにならなくても、きっかけになってくれればと思います。いろんな事を経験しどんどんチャンスを掴んで大きな力にしてください。

どんなことも人任せではなく自分が動くことが大切だと思います。いろんなことに挑戦し自分自身を輝かせて欲しいです。

長いようで短い泊8日のマレーシア植林ワークキャンプ
2007夏にスタッフとして参加して、高校生みんなと過ごせ
た時間は私にとって勉強にもなり楽しい日々でした。この夏の
経験が無駄にしないように成長していきます。

高校生のみんな・支えてくれたスタッフ・マレーシアに関わっ
た全ての人。みんながいたからこの夏があったと思います。本
当にありがとう。



OGAWA YUSEI
小川裕聖

馬來西亞紀行

始めに、三好さんを始め現地NGO団体のEGAOの皆様、アカデミートラベルの皆様、当会の活動にご理解をいただいた参加者のご両親やご家族の皆様、この活動を何らかの形で支えてくださった皆様、本当に感謝いたします。そして、事前事後活動と約3ヶ月に渡る長期によるこの活動の中、最後まで意欲を失わず積極的に活動に参加し、自分自身の成長を遂げた参加者の皆様には敬意を表したいと思います。また、私は当企画には、スタッフとして参加したわけですがスタッフとして行き届かない部分があったなら、参加者のみなさんには本当に申し訳なかったと感じています。

さて、参加者のみなさんは今回のワークキャンプで沢山のことを感じ、学んだことと思います。環境問題に関してはもちろんですが、生活水準・文化・価値観などの差異、言語が異なる人との意思伝達が難解であること、学校での教育や事前学習などでは明らかに学べない様々なことを実際に体験できたと思います。私はその経験こそが今のみなさんには必要であると思います。普段の生活範囲は世界的規模ではほんの一部であり、自分が守っている常識や思想も本当に狭く、小さいものだということ。今自分が生活している場所とは異なる場所では、その地域での常識があり、そこで生活する人々がいるとい

うことを忘れないでいて欲しいと思います。世界的視野を持つということは自分の常識だけでなく、異なる場所で自分と違う生活習慣を持つ人をお互いに理解し合い、認めることができることだと思います。

また、植林を通してみなさんは自分と向き合うことができたと思います。普段は学校でも塾でも部活でも、全てにおいて他者と自分を比較することで評価がなされる。相対的評価の社会で生活する現代の私たちはつい、第三者の行動について時に感心し、時に自分たちの行動を強制する。それは、確かに楽で簡単なことかもしれないが本当に正しいことなのか。自分自身と向き合い、自分自身に自問自答を行い、自分自身に回答していく。今回の植林活動では他人がどのような行動をするのかではなくあくまで自分と会話してもらいました。そのことが、これから生活していく上でみなさんの財産になると考えたからです。

最後に、今回の活動で沢山の経験をしたと思います。マレーシアの方々からも沢山の影響を受けたと思います。その逆に受け入れをしてくれたマレーシアの人たちにみなさんが与えた影響は何がありますか。自分自身と向き合い、今回の活動を回想しながら考えてみてください。

NOJIMA YUSUKE
能島裕介

変えられること、
変えられないこと



もうなんどとなく、ワークキャンプの感想文を書き続けてきた。もうそろそろネタも尽きかけている。どのワークキャンプでも、僕たちが目指すことは同じだし、どのワークキャンプでも高校生達が学び、感じることはほぼ同じだ。もちろん参加者によって、雰囲気や多少の違いはあるが、全体を見れば取り立てて大きな違いはない。だからといって、毎回同じ感想文を書く

のはためらわれるので、いつも感想文の提出を求められると頭を抱える。初めての体験であれば、山のような感想を書くことができるかも知れない。しかし、僕にとってはもう何度も繰り返されてきた光景なのだ。

そんなことを考えたとき、あることに気づいた。何度も繰り返されるワークキャンプのなかで、「変わるもの」と「変わらない

いもの」があるということだ。別の言い方をすれば、「変えられるもの」と「変えられないもの」の違いなのかもしれない。アメリカの神学者であったラインホルド・ニーバーはこんな言葉を残している。

「主よ、

変えられることについては、それを変えることのできる勇気を与えてください。

変えられないことについては、それを受け止めるだけの冷静さを与えてください。

そして、変えられることと変えられないことを区別するだけの知恵を与えてください。」

僕たちは参加者である高校生に多様な選択肢を提供することをこのワークキャンプの目的としている。おそらくそれはこれからも変わることはないだろう。どんな動機で参加したにせよ、マレーシアの山間の小さな村で高校生達が学び、気づくことは、世界の広さであり、異文化であり、自分とは異なった価値観の存在なのだ。そして、異なった価値観との遭遇は、強烈なインパクトとともに自らがこれまで抱いてきた価値観を根

底から揺るがすこととなる。そこには動揺や葛藤があり、時には自己否定や自分を取り巻く環境の否定が生じることもある。そのような揺れ動く心情のなかで、自分自身の価値観や選択肢はより大きく、広くなっていくのだ。

ただ、みんなに知っておいてほしいことは「変えられること」と「変えられないこと」、「変えるべきこと」と「変えるべきでないこと」が存在しているということだ。異なった価値観を受け入れるということは、決してこれまでの自分の価値観をすべて否定することではない。だからこそ、いつも以上の冷静さをもって自分や周囲を見つめ、自分がこれから歩むべき道を探していくことが求められるのだと思う。

マレーシアに行って、一人一人が感じたことは様々だと思う。一人一人がそれを思い返し、自分のこれからを考えてほしいと思う。そして、一人一人が勇気と冷静と知恵を持って、この世界のなかで何をなすべきかを見つけてほしいと思う。

それが僕たちの変わることのない思いなのだ。



Survey and Study



参加者の変化に関する調査

本ワークキャンプに関する参加者の評価



MALAYSIA PLANTING TREES WORK CAMP 2007 SUMMER

アンケート結果に基づく本事業の評価

■ 参加者の変化に関する調査

本ワークキャンプを通して参加高校生たちにどのような変化があったのかを測るために、事前プログラムの初めにおいて、アンケートを実施し、各項目について0[まったくそう思わない]から5[強くそう思う]の6段階評価で回答してもらいました。また、帰国後に行った振り返り研修においても同じ内容のアンケートを実施し、以下にその内容と項目ごとの平均点を示し、事前と事後の変化を表しました。ここでは、そのアンケートの中から特筆すべき項目について取り上げ、考察を加えてみます。(事前の有効回答数が23、事後の有効回答数が16と多少の誤差はある)

設問は25項目で、性質別に分けると、

- a、主に自分自身の内面に関すること(設問1、2、3、10、12、21)
- b、主に対人関係に関すること(設問4、5、6、7、8、9、15、16、22、23)
- c、主に環境問題に関すること(設問17、18、19、20)
- d、国際的関心(設問13、14、24)

となります。

(参加者の内面的変化について)

aの主に自分自身の内面に関することでは、その平均は3.47から3.70と大きく増加しています。特に設問12「自分の将来について真剣に考えている」では+0.65と増加率が大きく、本ワークキャンプでの様々な出会いや経験がそのきっかけになったと思われます。全体的に増加している中で唯一、設問10は変化率がマイナスになっていますが、これは勉強会や植林活動を通じて感じた環境問題の難しさ、マレーシアという異国の文化に触れるなどといった、戸惑いを覚える場面に直面した際の、自身の行動を考えての結果なのではないでしょうか。

(参加者相互の対人関係について)

bの主に対人関係に関することでは、その平均は3.68から3.81と増加しています。興味深い点は、設問6、8の変化率がマイナスになっていることです。どちらもワークキャンプを通じて得た様々な出会いから、自身の考え方や価値観が変化した結果といえるでしょう。ただし内容的に相反する設問内容がマイナスになっている点を考慮すると、まだそれらの変化は終わっておらず、現段階では整理しきれていないのではないのでしょうか。

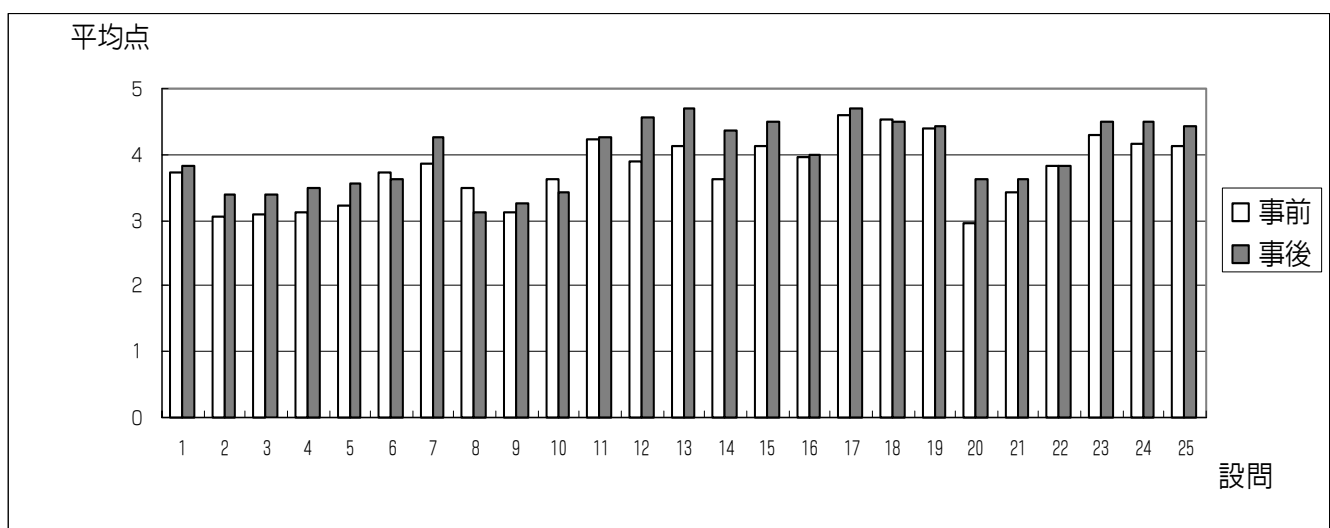
(環境問題に関する意識・行動の変容について)

cの主に環境問題に関することでは、その平均は4.12から4.31と増加しています。特に設問20「日ごろ、環境問題を意識して何か活動を行っている」では+0.67と増加率が大きく、ワークキャンプのテーマである環境について、事前学習で学び、現地でその現実を自分の目で確かめ行動したことが、自発的に環境問題に取り組む意識を生み、考えるきっかけになったと思われます。

(参加者の国際的な意識について)

dの国際的関心では、その平均は3.97から4.52と非常に大きく増加しています。これはマレーシアという、習慣も文化も違う国で生活したことにより、日本以外の国に目を向け、またそれにより自国の文化、歴史についても関心が生まれた結果ではないでしょうか。

設問	アンケート項目	平均点			変化値
1	何事にも挑戦するほうだ	3.74	→	3.81	+0.07
2	一度決めたことは最後まであきらめない	3.04	→	3.38	+0.34
3	目標に対して最後まで投げ出さずに取り組むことができる	3.09	→	3.38	+0.29
4	初対面の人には自分から話しかけるほうだ	3.13	→	3.50	+0.37
5	自分の意見や考えを相手に伝えることができる	3.22	→	3.56	+0.34
6	人の意見に流されない自分の意見を持っている	3.74	→	3.63	-0.11
7	自分とは違う意見や価値観を受け入れることができる	3.87	→	4.25	+0.38
8	相手の立場に立って物事を考えられる	3.50	→	3.13	-0.37
9	人と本音で話すことができる	3.14	→	3.25	+0.11
10	状況に応じて、適切な行動をとることができる	3.61	→	3.44	-0.17
11	自分の意見や考えを相手に伝えることができる	4.22	→	4.25	+0.03
12	自分の将来について真剣に考えている	3.91	→	4.56	+0.65
13	自国の文化や習慣に興味がある	4.13	→	4.69	+0.56
14	他国の文化や習慣に興味がある	3.61	→	4.38	+0.77
15	コミュニケーションにおいて言語力よりも大切なものがあると思う	4.13	→	4.50	+0.37
16	外国人とコミュニケーションをとることに抵抗はない	3.96	→	4.00	+0.04
17	環境問題は深刻な問題であると感じる	4.61	→	4.69	+0.08
18	環境問題は身近な問題であると思う	4.52	→	4.50	-0.02
19	一人一人の取り組みによって、環境問題は改善されると思う	4.39	→	4.44	+0.05
20	日ごろ、環境問題を意識して何か活動を行っている	2.96	→	3.63	+0.67
21	物事に対して自発的に取り組むことができる	3.43	→	3.63	+0.20
22	人と協調して生活することができる	3.83	→	3.83	±0.00
23	人は助け合いながら生きていると思う	4.30	→	4.50	+0.20
24	世界中で起こっている様々な出来事に興味がある	4.17	→	4.50	+0.33
25	今の生活は幸せだと感じる	4.13	→	4.44	+0.31



■ 本ワークキャンプに対する参加者の評価

本ワークキャンプに対する参加者の評価を知るため、事前学習からワークキャンプ本番の内容、スタッフの対応まで詳細な項目について、0[まったくそう思わない]から5[強くそう思う]の6段階評価で回答してもらい、以下にその内容と項目別平均点を示しました。

また、アンケート結果を視覚的にわかりやすくするため、

AA 項目別平均点 4.50以上

A 項目別平均点 4.00以上4.50未満

B 項目別平均点 3.50以上4.00未満

C 項目別平均点 3.00以上3.50未満

D 項目別平均点 3.00未満

とランク分けをしました。ここではその中から特筆すべき項目を挙げ、考察を加えたいと思います。全体の平均点は4.12という結果になりました。

まず、事前勉強会については、その平均点は4.09と全体の平均とほぼ同じ結果になりましたが、設問5、6、7の実施時間、場所、回数についての平均点が4.00を下回っている点は見逃せません。学校によっては土曜日も授業があり、夏休み前の学期末ということでテスト期間が重なる高校が多く、また参加者が住んでいるところも近畿圏内がほとんどであるとはいえ、多方面にわたり、会場まで何十分もかかってしまう参加者もいました。今後の対策として、事前に参加者の予定や出身地を調査し、できる限り全員が参加できる日、場所を選定していく必要があります。

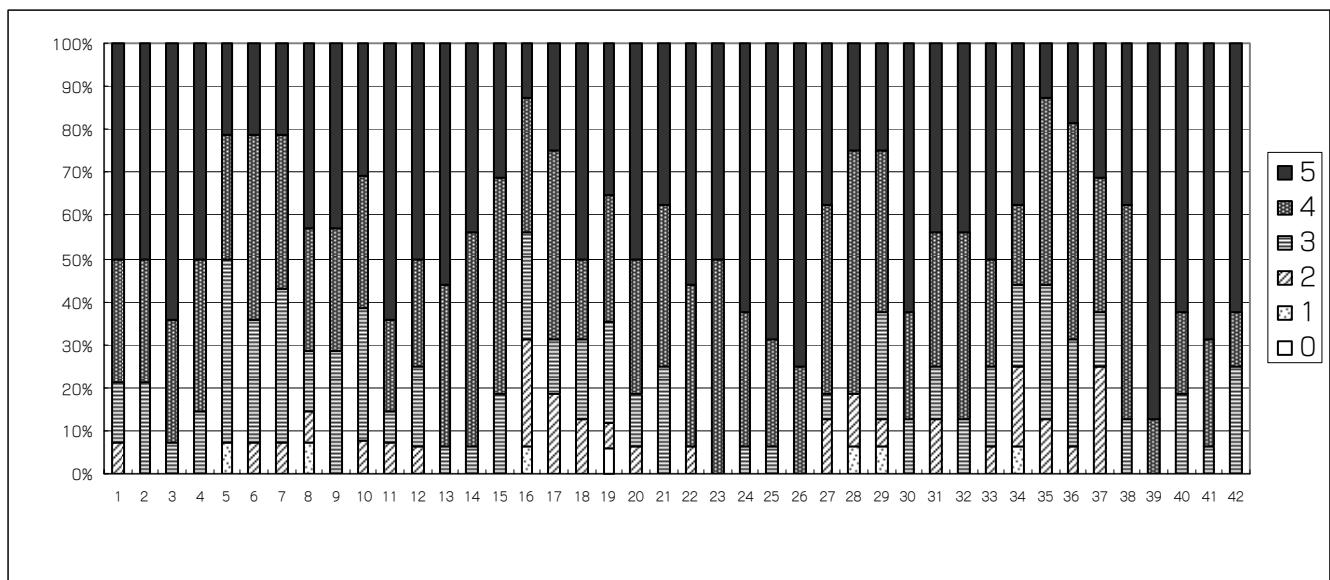
また、「実施期間」「参加者」に関する項目については平均を全て下回った結果となっています。実施期間の理由としては、やはりホームステイの期間が短いという意見が多かったように、もっとマレーシアにいる期間を延ばす必要があったということだと思われます。夏休みという長期休暇に行える利点を生かし、今後はホームステイの泊数を延ばしたプランをたてていくべきでしょう。参加者の理由としては、男女比の問題が挙げられます。ワークキャンプは女性の参加者が多い傾向があり、今回は特にその傾向が顕著で女性22名に対して男性1名という構成になってしまいました。ニーズの違いもあり、難しい問題ですが今後は5:5の割合に近づけるように、広報の工夫をしていく必要があります。

ワークについては、概ね高い評価を受けており、今回の参加者にとっては満足のいくものだったようです。

ホームステイに関する項目は全て平均点を下回った結果となりました。これは上でも述べた期間の問題に加えて、食事やトイレ等の生活様式の違いが影響していると思われます。特に食事に関しては、ステイ先の家族の方が大量の食事を用意して下さるため、参加者からも量が多いという意見が出ていました。しかし食事を残すのが礼儀などの、異文化の違いを受け入れてこそそのホームステイなのではないでしょうか。

本ワークキャンプの運営に関する項目、「連絡体制」「安全／健康」「スタッフ」では非常に高い評価を得ました。安全面／健康面に関して、私たちは事前の段階からなによりもまずそれを第一に考え、行動しました。そして、初めての海外、初めて異文化の中で生活する高校生たちを精神面、健康面でサポートできたことは、歳の近い大学生スタッフが同行したことが大きな要因となっていると思われます。

プログラム	No.	アンケート項目	平均点	評価
勉強会	1	マレーシアでの活動を知る上で役に立った	4.21	A
	2	マレーシアの問題を知る上で役に立った	4.29	
	3	環境問題について考えることができた	4.57	
	4	植林をする意味を知ることができた	4.36	
	5	実施時間は適当だった	3.57	
	6	場所は適当だった	3.79	
	7	回数は適当であった	3.71	
街頭募金	8	時間は適当であった	3.93	A
	9	場所は適当であった	4.14	
	10	回数は適当であった	3.85	
	11	街頭募金をして、マレーシアへ行くという自覚が高まった	4.43	
連絡体制	12	スタッフからの連絡は必要なことをきちんと伝えていた	4.19	A
	13	スタッフの電話の対応は安心感を与えるものだった	4.50	
	14	どんなときもスタッフに連絡しやすかった	4.38	
	15	問い合わせに対して速やかに対応がなされていた	4.13	
実施期間	16	宿泊日数(マレーシア滞在時間)はちょうどよかった	3.19	C
	17	マレーシア滞在時期は適当であった	3.75	
参加者	18	人数はちょうどよかった	3.87	B
	19	構成(学年・性別)は適当であった	3.69	
集散	20	時刻・場所は適当であった	4.25	A
	21	集散は円滑に行われていた	4.13	
	22	移動は円滑に行われていた	3.94	
安全／健康	23	ワークキャンプ中の安全の配慮は十分だった	4.50	AA
	24	手洗い、食中毒防止などの衛生管理は十分な配慮がなされていた	4.56	
	25	怪我・病気等に対する対応が十分になされていた	4.63	
	26	スタッフは健康面を常に配慮してくれていた	4.75	
日程	27	ワークと観光のバランスは適当だった	4.06	B
	28	観光は満足のいくものだった	3.81	
	29	日曜市場での買い物は満足の行くものだった	3.69	
ワーク	30	休憩できる時間は十分にあった	4.50	A
	31	労働量は適当だった	4.06	
	32	安全性は適当だった	4.31	
	33	ワークの内容は満足のいくものだった	4.19	
ホームステイ	34	期間は適当だった	3.63	B
	35	食事の量・質・衛生面は適当だった	3.56	
	36	家庭の衛生面は適当だった	3.81	
交流	37	日本の生活・習慣・文化について紹介することができた	3.69	A
	38	マレーシアの生活・習慣・文化について知り、理解することができた	4.25	
	39	現地の人と楽しい時間を過ごすことができた	4.88	
スタッフ	40	人数は適当であった	4.44	A
	41	危険なことについて適宜注意してくれた	4.63	
	42	精神面でサポートしてくれた	4.38	



Publicity Report

2007/11/5 読売新聞朝刊▽

節約の大切さ気づいた

マレーシアで植林キャンプ

西宮 高校生ら活動報告

西宮市のNPO法人「ア
レーンヒューマニティ」
(能島裕介理事長)が今夏、
高校生を対象にマレーシア
で実施した植林ワークキャ
ンプの報告会が4日、同市
北口町の大学交流センター

で開かれ、参加した生徒た
ちが、企画を通して感じた
環境問題や異文化交流に対
する考えなどを述べた。
ワークキャンプは、社会
の抱える課題に目を向け、
視野を広げてもらおうと企

画。県内と大阪府、愛知県
の高校生23人が8月21、28
日、過度の森林伐採による
環境破壊に悩まされるマレ
ーシア・サバ州で、ホーム
ステイをしながらゴムの木
の苗木など約1000本を

環境問題



ワークキャンプでの体験を基に、環境問題につ
いての考えを述べ合う生徒たち(西宮市で)

植えた。

約30人の保護者らが見守
る中、スライドでキャンペ
ンの様子が映された後、生徒
5人が司会者からの質問に
答えた。5人は「植林をし
て小さなことが将来につな
がると気づいた。日本で身
近な節約などを始めたい」
と述べる一方、「現地の人
が道にプラスチック製品を
捨てるのを見て心が痛ん
だ」などと回答していた。

また、現地での生活に
ついて、「豊かな暮らし
の中で、人々の優しさや
笑顔など大切な物が見え
なくなっていた。また訪
れたい」などと感想を漏
らしていた。

Special Thanks

本ワークキャンプを実施するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。
心から御礼申し上げます。

協 力

Eco-friendly Grassroots Assistance Organizers(EGAO)
越井木材工業株式会社
株式会社アカデミートラベル
マレーシア航空
置塩医院



マレーシアでお世話になった方々

三好 良一(EGAO)
三好 おさむ
ユノス・シウケン
コシナール社の人々
ティウロン村の人々

日本でお世話になった方々

松田 廣滋(株式会社アカデミートラベル)
アン・アイビー(マレー語教師)

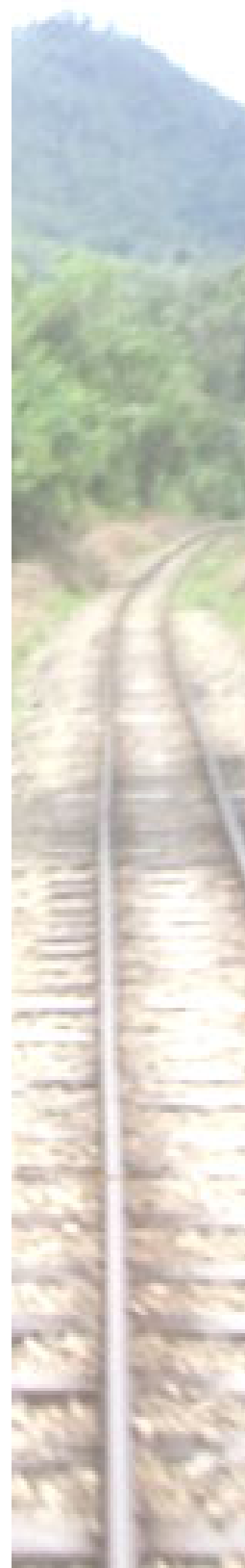


そしてー

街頭募金にご協力いただいたすべての方々
マレーシアで出会った全ての人々
このワークキャンプを支えていただいた全ての人々



(順不同 敬略称)



Editor's Comments

早いもので、私たちがマレーシアから帰国してから3ヶ月という月日が経ってしまいました。

報告書の作成にあたり、一番に思い出されるのはやはりとびきりのみんなの笑顔でした。マレーシアという大地で大いに笑い、考えそして涙した一週間。あの時感じた思いはいま、みんなの中にどれだけ残っているのでしょうか。

この報告書があのかげがえのない日々をいつまでも残すものとなり、高校生たちが次のステップへ進むための架け橋となることを願って止みません。

最後になりましたが、本ワークキャンプ実施にあたりご協力いただいたすべての方々に、心より御礼申し上げます。

2007年 12月1日 北川 達也



高校生マレーシア植林ワークキャンプ2007夏 報告書

発行者 能島 裕介
編集者 北川 達也 西谷 真奈 室谷 那穂子
山口 紀子 小川 祐聖 西井 佐織
発行日 2007年12月1日
発行所 特定非営利活動法人 **BrainHumanity**
〒662-0832
兵庫県西宮市甲風園1丁目3番12号 カミヤビル3階
tel 0798(63)4441 fax 0798(63)5551
URL <http://www.brainhumanity.or.jp>
E-mail info@brainhumanity.or.jp
印刷所 有限会社 プリント・ムトー



旅行企画

特定非営利活動法人 **BrainHumanity**

旅行主催

日新観光株式会社

旅行取扱

株式会社アカデミートラベル

協 力

Eco-friendly Grassroots Assistance Organizers